研 究 部

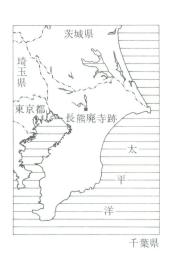
佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告書



昭和62年3月

財団法人 千葉県文化財センター

佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告書



昭和62年3月

財団法人 千葉県文化財センター 研 究 部

序文

千葉県下には、国分寺跡をはじめとして40数か所にのぼる古代寺院跡の所在が確認されています。これらの寺院跡は、奈良・平安時代における地域の歴史・文化を解明する上で重要な遺跡でありますが、発掘調査を実施し、その内容をは握した例は数少ない状況です。

千葉県教育委員会では、古代寺院跡の規模・時代等を明らかにして、その保存策を講ずる資料とする目的で、国庫補助事業として昭和55年度から確認調査を実施してきました。

本年度は、佐倉市長熊に所在する長熊廃寺跡の調査を実施し、その結果、遺構として 基壇1基を検出しました。また、出土遺物には八葉蓮弁重圏文の鐙瓦、忍冬唐草文の宇 瓦などの瓦類のほか、瓦塔、「高罡寺」の墨書のある土器などを検出し、千葉県における 古代寺院跡の解明にとって、重要な資料と課題を提供し、大きな成果を得ることができ たと考えております。

このたび、その発掘調査の成果を調査報告書として刊行する運びとなりました。この報告書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護・活用のために広く一般の方々にも利用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に当たって、多大なる御協力をいただいた佐倉市教育委員会、酒々井町教育委員会をはじめ地元関係の皆様、そして調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの職員及び調査補助員の方々の御労苦に対し、心から感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

千葉県教育庁文化課長 竹内 一雄

本文目次

序	文						
例	貴						
Ι	はじめに	1					
	1. 長熊廃寺跡の位置と環境	1					
	2. 本廃寺跡周辺の遺跡	1					
II	調査経過	4					
	1. 調査経過	4					
	2. 調査方法	5					
III	檢出遺構	6					
	1. 基壇(SB-1) ······	6					
	2. 基壇北側瓦出土土壙(SK-1)·······	7					
	3. その他の土壙(SK-2),(SK-3),(SK-4),(SK-5) ····································	8					
	4. 溝(SD-5) ······						
	5. その他の遺構(SX-1),(SI-1),(SI-2) ····································	9					
IV	遺物出土状況	10					
	1. 主要遺物出土状況	10					
V	出土遺物	12					
	1. 瓦						
	2. 瓦塔						
	3. 土器他	-					
VI	まとめ						
	1. 遺構						
	2. 遺物	19					
	3. 結語	24					
	挿 図 目 次						
	THE DIV						
fig.1							
fig.3							
	5 塚近景						
	7 地区割模式図 ····································						
	5 王安夏初山工位直区 11 11g.10 競九侯氏区 11 常陸国分寺出土鐙瓦拓影及び実測図 11 常陸国分寺出土鐙瓦拓影及び実測図 11 常 11g.12 宇瓦 I 類模式図 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11						
	13 既出の珠文字瓦 ····································						
	15 女瓦の比較						
fig.1	17 ミツサワ出土瓦塔軸部16 fig.18 「髙罡寺」模写図						
	19 鉄釘実測図17 fig.20 両総における山田寺系鐙瓦の分布						
fig.2	21 パロメット文宇瓦類例20 fig.22 房総における瓦塔の分布	·21					
表目次							
tab.1	.1 隅切女瓦計測表	23					

図版・図面目次

			凶败。凶叫自认						
P	L.								
	1	航空写真	空からみた長熊廃寺跡周辺の地形						
			第1図 長熊廃寺跡周辺の地形図						
	2	基壇	1.基壇北東隅 北から 2.基壇南西隅 西から						
			3.基壇北西隅 北から 4.基壇南側 南から						
	3	基壇	1.基壇版築状況 北から 2.基壇土層断面 西から						
			3.基壇東側 南東から						
			第1図 基壇北端部土層断面図						
	4	土壙	1.SK-1検出状況 北東から 2.SK-1覆土上層 西から						
			3.SK-1調査状況 北東から						
			第1図 SX-1土層断面図						
	5	土壙	1.SK-2検出状況 南西から 2.SK-4土層断面 南から						
			3.SK-5調査状況 南西から						
			第1図 SK-4平面図及び土層断面図						
	6	溝•住居跡他	1.SD-5遺物土状況 北から 2.SD-5土層断面 南から						
			3.SX-1検出状況 南南東から 4.SI-2検出状況 北東から						
			5.SD-5検出状況 北から						
		第1図 SD-5平面図及び土層断面図							
			第2図 SX-1付近土層断面図						
	7	鐙瓦I類	I類(1~6)						
	8	鐙瓦II・III類	II類(1~6) III類(7,8)						
	9	字瓦I類	I類(1~7)						
	10	字瓦II類他	II類(1, 2) 不明(3) 宇瓦女瓦部(4~6)						
	11	男 瓦	I類(6~10) II類(1~5)						
	12	女瓦I類	I類(1~7)						
	13	女瓦II類	II類(1, 2)						
	14	女瓦II類	II類(1~5)						
	15	隅切女瓦	I類(1~3) II類(4~6)						
	16	瓦 塔	屋蓋部 (1~4) 斗供 (5~7)						
	17	土器他	土器 ($1 \sim 23$) スラッグ他 (24 , 25)						

図面目次

PLAN

- 1 地形測量及びトレンチ配置図
- 2 遺構全体図
- 3 基壇平面及び土層断面図

例 言

- 1. 本書は、佐倉市長熊260番地他に所在する簑熊廃寺跡の確認調査報告書である。
- 2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助金を得て、調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
- 3. 調査は、昭和62年11月4日から11月29日にかけて実施した。
- 4. 調査および整理作業・報告書作成にあたっては、研究部長 鈴木道之助、部長補佐 渡部 智信・古内 茂のもとに、執筆は調査研究員 永沼律朗が担当した。
- 5. 調査の実施にあたっては、佐倉市麻賀多神社宮司郡司幹夫氏、佐倉市長熊区五良神社氏子石井喜三良、鈴木忠悦氏らには、多大な協力を得ると共に、下記の地主の方々にも農耕地を快く貸していただくご配慮をいただいた。ここに明記して感謝の意を表します。

斉藤正美,小嶋四郎,小川仁太郎,高橋由雄,高石慶子(敬称略)

- 6. 調査の実施にあたっては、下記の機関から多くの御協力をたまわった。 佐倉市教育委員会・酒々井町教育委員会・(財)印旛郡市文化財センター 特に佐倉市教委員会の川島英彦氏には、たびたび地名を調べていただき、(財)印旛郡市文化 財センターには、長熊廃寺跡の隣接地で発掘調査が行われた未整理の高岡遺跡群の資料を実 見させていただいた。
- 7. 調査に関しては、下記の方々より、種々の御教示をいただいた。 阿部義平・大脇 潔・安藤鴻基・田中新史・豊巻幸正・山口直樹・郷堀英司・山路直充・井 上裕一・北詰栄男(敬称略)

特に、宮本敬一・今泉 潔両氏からは、多大な助言と協力を得て、本報告書が完成したことを記して、感謝の意を表わします。



瓦工人の手相(½)

女瓦I類凸面の側縁に残る。この類の女瓦にしばしば見られる特徴である。おそらく,瓦工人が凸型の上で粘土を工作中についたものであろう。瓦工人の右手の手の平土手部,親指の付け根の部分から生命線にかけての手相が,瓦に転写されて残っている。

われわれも、物を強く押しつけねばならない時には、こ の部分を使うのと同じである。

瓦工人の生命の息吹が感じられる。

Iはじめに

1. 長熊廃寺跡の位置と環境 (fig.2, PL.1 参照)

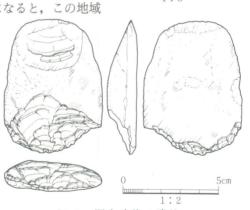
長熊廃寺跡(以下本廃寺跡とする)は、江戸幕府の家老職を勤めた堀田氏の居城、佐倉城跡の一角に建設された国立歴史民俗博物館の南東約3kmのところに位置する。

この地域は千葉県北部にあたり、利根川流域に散在する湖沼の一つ印旛沼南方の台地上に位置する。現在は干拓が進み東西に分断されている印旛沼には、高崎川、鹿島川、手操川等の河川が流れ込んでいる。そのうちで印旛沼の南東部に河口をもつ鹿島川は、上流2kmの佐倉城跡の西側で、南東方から流れてくる支流の高崎川と合流する。本廃寺跡は、その高崎川中流の奥まった台地上にある。台地は、南側に高崎川から続く支谷が入り込み、西側にも北方からのびる谷があり、北及び東側には、さらに台地が広がる。即ち、本廃寺跡は、南側を谷に面した台地の南端に位置しているのである。

2. 本廃寺跡周辺の遺跡 (fig.2 参照)

本廃寺跡の周辺は、近年の開発により、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査が急激に増え、遺跡が消滅することと反して当地の歴史が解明されつつある。印旛沼の南岸に面したこの地が、縄文時代から既に人々の生活が営まれていたことは、今回の調査区内からもその時代の遺物が出土していることから窺い知れる(fig.1-1 は、前期の土器、2 は、黒曜石で作られた石鏃、3 は、早期の所産になると思われる2方向に刃を付けた礫器である)。しかし、遺物量は少なく、大規模な集落があったとは思えない。弥生時代になると、この地域

は、東方からの文化と北方からの文化の接する 地域だったようで所謂南関東系の弥生式土器と ともに北関東地方によく見られる土器がいっし ょに出土することがあるが、今回の調査では、 一片の弥生式土器も出土していない。fig.3 の土 器は、後述の基壇南東方の住居跡(SI-1)上面 で出土した古墳時代前期の土器である。今回の 調査では、本廃寺跡より古い時期の住居跡はこ の1軒だけであり、遺物も掲載したほかには数



10cm

fig. I 繩文時代の遺物

- * 栄町の龍角寺や印西町の木下別所廃寺跡がその例である。
- ** 佐倉第三工業団地内の遭跡群や国鉄佐倉駅周辺の大崎台遺跡、国道のバイパス工事に伴う遺跡の調査などをあげることができる。
- *** 先土器については、今回の本廃寺跡の調査では遺物は出土していないが、後述の高岡遺跡群では出土しており、 縄文時代以前から人々の生活は始まっていたのであろう。

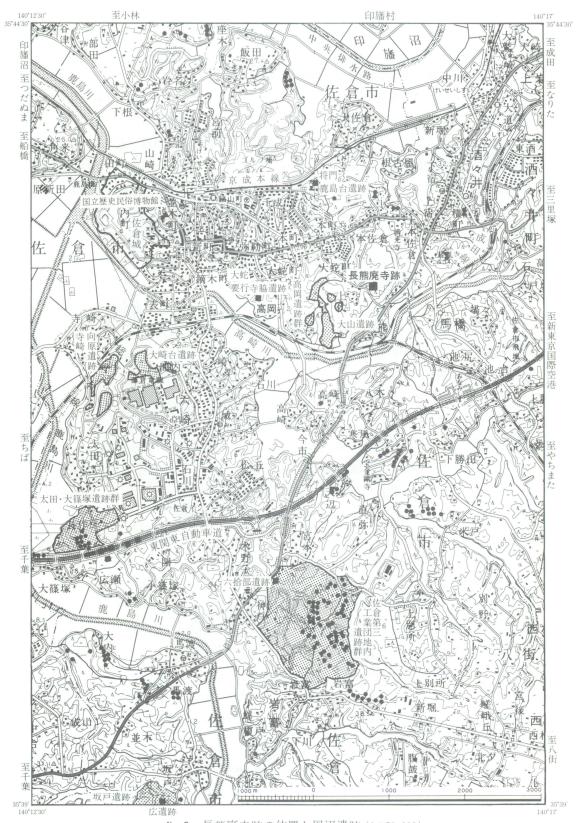


fig.2 長熊廃寺跡の位置と周辺遺跡 (1:50,000)

も少なく、古墳時代の前期までは、この地は人々 の生活の中心地ではなかったようである。しかし、 古墳時代も後期になると、集落の存在は明確では ないが、古墳は存在する。基壇から北東に100mほ どの所に鎮座する愛宕神社は、周辺よりも一段高 く,周囲には幅2mの溝が巡ぐっており,社殿の 正面には fig.4 に見るように箱式石棺の遺材が並 べられている。今回の確認調査では、古墳の存在 は確かめられず、この石棺材がどこの古墳から運 ばれてきたものかは不明である。また、本廃寺跡 の所在する台地の南の先端には fig.5 のような塚 があり、立地からみて古墳が改変されたものかも しれない。fig.2 の地形図に示した古墳の分布から も,これらの他に周辺に古墳が存在した可能性は 高く、後に本廃寺を造営する基盤がこの頃にはで きていたと思われる。

周辺の遺跡を記すにあたり、是非触れなければならない遺跡がある。それは、本廃寺跡から直線距離にして500m程先の谷向い、つい最近まで発掘調査の行われていた高岡遺跡群である。この遺跡群は、谷によって遺跡が分けられているが、そのなかでも大山遺跡は、8世紀以降の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡が多数検出されていて、本廃寺跡と何らかの関係があったと思われる遺跡である。しかし、まだ整理作業が始まったばかりであり、今後の成果が待たれる。坂戸広遺跡と将門鹿島舎遺跡からは、共に「寺」の銘のある墨書土器が出土している。他にも触れなければならない遺跡はあるが、fig.2 にその位置を記しておくにとどめる。

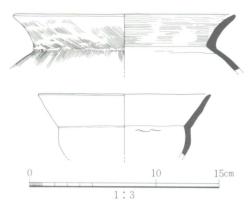


fig.3 古墳時代の土器



fig.4 箱式石棺遺材



fig.5 塚近景

- * 石棺遺材は、後期古墳の埋葬施設によく見られるものであり、この近くから出土したのであろう。
- ** (財)印旛郡市文化財センターにより昭和58年から61年にかけて発掘調査が実施された。同センターの西山太郎・鈴木定明両氏に便宜を計っていただき,遺跡の内容については,村山好文・宮内勝巳両氏から説明を受けた。
- *** 渋谷興平·渋谷 貢『坂戸遺跡』坂戸遺跡埋蔵文化財発掘調査団·坂戸遺跡調査会 昭和61年2月15日
- **** 海野道義他『佐倉市将門字鹿島台遺跡調査報告』 佐倉市教育委員会•佐倉市遺跡調査会 昭和50年3月31日
- **** 他に、大福寺遺跡、大蛇要行寺遺跡も、本廃寺跡と関係があると思われる。 『昭和60年度 財団法人印旛郡市文化財センター年報 2』(財)印旛郡市文化財センター昭和60年3月31日

II 調 査 経 過

1. 調查経過

本廃寺跡の調査は、千葉県教育委員会が実施している古代寺院跡確認調査の一環として行われたもので、財団法人千葉県文化財センターが委託を受け、昭和61年11月4日から同月29日にかけて発掘を行った。

(1) 長熊廃寺跡の調査歴

本廃寺跡が世間に知られるようになったのは,第 2 次世界大戦後のことである。文献によれば,昭和22年に佐倉市本町に在住していた目等 清氏が上代付近の畑で布目瓦を拾い,北詰栄男氏の所へ持参したのが発端だったようである。その後,『京成文化』に瓦のことが記事となり,それを読んだ立正大学の学生が現地を踏査し,瓦塔の破片を採集した。大学に持ち帰られた瓦塔はたちまちのうちに問題資料に取り上げられ,発掘調査実施の気運が高まった。本格的に調査が開始されたのは,昭和26年8月だった。久保常晴氏・丸子 亘氏等の指導のもと,立正大学の学生によって発掘が実施され,以後数次にわたり遺構の発見並びに寺域の確認を目的とした調査がくり返された。これらの調査の成果については,幾つかの報告がなされているので,詳細はそれらを参考にされたい。また,地元の高等学校等も発掘調査を実施しているようであるが,それらについては報告がなく詳らかでない。



fig.6 発掘前基壇復元状況

その後、この遺跡の重要性を重視した千葉県は、昭和42年3月7日に県の指定史跡に指定し、近くまで伸びてきた開発から遺跡を守る策を講じてきた。また発掘後、基壇の南側が大きくえぐられていたのでfig.6に見るように基壇に土盛をして復元し、地元佐倉市長熊区住民の協力のもとで保護されてきた。

- * 久保常晴他 「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」『銅鐸』第9号 立正大学考古学会 昭和27年3月
 - 丸子 亘 「長熊廃寺周辺古瓦出土住居址二例」『銅鐸』第14号 立正大学考古学会 昭和33年7月
 - 坂詰秀一 「日本各地の寺院跡 関東」『仏教考古学講座』 2 寺院 昭和50年6月
 - 久保常晴 「考古学的遺跡の発掘(下)(3)千葉県印旛郡和田村長熊廃寺」『歴史教育』5-5 昭和32年5月
 - 久保常晴 「千葉県印旛郡長熊廃寺講堂・塔址」『日本考古学年報』 4 日本考古学会 昭和30年12月
 - 久保常晴 「千葉県印旛郡長熊廃寺講堂・塔址」『日本考古学年報』 5 日本考古学会 昭和32年3月
 - 丸子 亘 「千葉縣印旛郡和田村熊野神社前の土師住居址発掘報告」『文学部論叢』第1号 立正大学文学部 昭和 28年11月30日
- ** 『千葉県記念物実態調査報告書』 I 千葉県教育庁文化課 昭和55年3月31日

(2) 調查経過

11月4日から始めた今回の確認調査では、先の調査の成果をふまえて、さらに成果がえられるような発掘区の設定に心掛けたが、一部杉・松林になっており目的の場所にトレンチを設定できない所もある。まず、立正大学の調査で金堂跡と推定された基壇について、その規模を確認するためにトレンチを設定して調査に取りかかった。その結果、基壇の存在は明らかであるが、基壇の北側に別の遺構があることも判明したので、基壇の調査と並行してこの遺構の調査も行った。さらに、他の建物跡検出のために、トレンチをこの基壇の東側と南側にあけていったが、建物跡は発見出来なく、基壇の北側で発見した土壙と同じような土壙をいくつか検出するにとどまった。五良神社・愛宕神社境内の調査が済んでから、基壇の北側にあたる畑にも発掘区を随時設定した。この地区においては、本廃寺跡の付属施設と寺域を画するような施設の発見に目的をおいていた。しかし、この地区からも土壙が発見され、上記の施設等は発見できなかった。また、5条の溝を検出し、この内の1条からは、墨書土器や完形の瓦も出土し、本廃寺跡と関係するものかと考える。この溝を基壇の西側でも確認すべく設定したトレンチでは、基壇の近くで発見された古墳時代前期の住居跡に続いて2軒目の住居跡を発見した。以上のような発掘経過を経て、時間に追われた不完全な調査も、11月29日には埋めもどしを完了して確認調査を終了した。

2. 調查方法

調査区の設定は, fig.7 に示したように公共座標 (昭和43年建設省告示第3059号の規定による

第IX座標系)を利用して行い, 大グリッドは20×20mとし, さらに小グリッドを設定した。 2×2mの最小グリッド名は 北西隅の地点名をそのまま用 い,遺構の位置及び遺物の取 り上げの便宜をはかった。

調査に際して、トレンチはなるべく座標にそった形で設定したが、調査区内が神社の境内であり、他にも植林された杉・松の木が多く、一部任意にトレンチを設定した部分もある。また、基壇の発掘には、遺構にあったトレンチを設定して調査を行った。

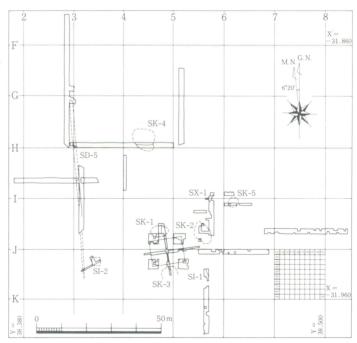


fig.7 地区割模式図

^{*} 主に、「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」『銅鐸』第9号を参考とした。

III 検 出 遺 構

今回の調査では、先の調査の成果から、伽藍の整った大規模な寺院跡を想定していたが、予想に反して基壇は一つしか発見することができなかった。以下、遺構の種別ごとに説明する。 遺構には、一連の番号を付し、遺構の種別を表わすため、SB-建物、SD-溝、SI-竪穴住居、SK-土壙、SX-その他の遺構の記号を遺構番号の前に付して表記する。

1. 基 壇 (SB-1) (PL.2, 3, PLAN3 参照)

立正大学の調査で金堂跡と推定された基壇については、その位置及び規模もおおよそわかっていたのでまずその基壇の確認をすることにした。先の調査当時は、以前に基壇が残って一段高くなっていた中央部に祠をまつりその南側を削って参道としていたらしく、その個所が大きく馬蹄形にえぐられていた。しかし、その後発掘調査が終了してから窪んだ所に土が盛られていて、現在は高さ60cmほどの矩形の土壇が出来ている。この土壇が、おそらく金堂跡とされた基壇を復元したものと考え、調査報告書の図面も参考にして調査区の設定を行った。しかし、杉・松の木のために意図した部分が発掘できない所も出てきた。

調査の結果、基壇の中央は、地山を掘り込んだ中に新しく築土を搗き込んだ、いわゆる版築の手法による掘り込み地業を行っていることが確認できた。しかし、前述のように基壇の南側は大きくえぐられ、基壇上面も攪乱が著しく、遺存状態は決して良いとは言えない。また、今までに多くの試掘や発掘調査が行われてあちこちにその痕跡があり、版築はかなり壊されている。基壇の周縁部も同様であり、版築の端は確定しにくい状態である。しかし、場所によっては、版築をするために掘り込まれた当時の旧地表面も確認できた。築土はローム土・暗褐色土・黒色土を用い、粘土は使用していないが、非常によく搗きかためられており、各層の厚さも薄く、きれいな縞状を呈している。版築は、掘方の底から50cmほどの旧地表面までは、黒色土を主に搗き込み、それよりも上部は、ローム土と黒色土を主とした土を交互に搗き込んでおり、ここを境として築土が、大きく変っている。基壇下部の掘り込み地業の範囲は、基壇の周縁部が版築の底以上に壊されているため明確にはわからない。また、基壇の盛土の範囲についても同様である。

今回の調査では、基壇の破壊を最小限に留めるため、版築の調査は周縁部に限ったので基壇中央部の様子はわからない。しかし、版築の端では、掘り込みが旧地表面から50cm程で、掘り込み下面はローム層に達していることが判明した。旧地表面から上部にどれだけ土が盛られていたかは不明であるが、今回の調査では建物の柱の基礎工事が確認出来なかったことからみて50cm以上あったと思われる。また、基壇の外装及び化粧には、石や瓦等を用いた様子はなく、千葉市小食土廃寺跡で確認された厚板の痕跡もない。その為に、変貌著しい基壇の規模は明らかではない。PLAN 3 他の基壇推定線は、各トレンチ内で検出した基壇の最も外になる部分を繋いだものである。この推定線での基壇の規模は、南北9.4m、東西12.6m になる。

^{*} 久保常晴他 「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」『銅鐸』第9号 立正大学考古学会 昭和27年3月

^{**} 永沼律朗 『千葉市小食土廃寺跡確認調査報告書』千葉県教育委員会 昭和61年3月31日

また、基壇の外郭線の外側周辺部で柱穴と思われるピットをいくつか発見した。これらには、明確な柱痕跡は確認できず、それほどしっかりとした柱を建てていたとは思えない。掘形径は、小さいので15cm、大きい柱穴で40cmほどある。なかには、盛土をした基壇の上に掘られているのもある。PL.8-7は常陸国分寺で出土した鐙瓦と同じ瓦当文様で、本廃寺跡の創建期より下った時期の鐙瓦と思われるが、この鐙瓦が基壇南東コーナー部確認トレンチ内5J-21のこの種のピットから出土している。このことからも、これらのピットの中には基壇の創建期より新しいものがあること



fig.8 基壇東側調査状況

は明らかである。ボーリング調査から、他のピットの埋土の中にも瓦が入っているものがあることも確認している。そこで、このピットの性格であるが、今回の調査では、攪乱の著しい基壇の上面では発見できず、基壇の外郭部に並行して検出できたことと、中には創建期以降のものもあることから、建物を新築したり修理をする際の足場を組むための柱を固定するピットではないかと考える。だが、それらの柱穴には、明らかな規則性はみられないので、柱間の推定等はできない。この他に基壇及び建物に伴うような施設は検出できなかった。また、基壇の外でも、建物が存在した当時の地表面や整地層等は、確認出来なかった。

先の調査では、この基壇以外にも塔・講堂・中門・南大門・回廊等が推定され、基壇も検出されたようであるが、今回の調査ではそれぞれの推定地に明確な基壇の痕跡を確認できなかった。しかし、後述のSX-1は非常に弱いながらも盛土があるが、基壇の可能性は低いと考える。その他にも掘り込みの浅い基礎工事であれば、発見しにくくなっていることも考えられるが、今回の調査の結果から、版築による基壇を伴う建物は一堂だけと考える。

2. 基壇北側瓦出土土壙 (SK-1) (PL.4 参照)

基壇北西コーナー部の調査中に、基壇から3mの所で北に広がる遺構を発見した。この遺構は検出した地点が基壇から非常に近いので、その性格・規模を追及するためのトレンチをさらに北へ拡張した。表土層を除去していく過程において、他の地点に比べて瓦の集中した層に当たった。この付近は、現在愛宕神社の参道になっており基壇周辺より低くなっているが、地表面から瓦の集中する層までは、約80cmの深さがある。この層のレベルで遺構を検出するために周囲を精査したところ、遺構はトレンチ内だけには留まらず、その外まで広がっていることが判明した。また、瓦が集中しているのは、基壇側の掘り込み上端近くから遺構の中央部付近にかけてであった。瓦を取り上げた後に、基壇から続けて土層の観察できるベルトを設定して、遺

構の一部を掘り下げた。その結果、遺構の掘り込みは、かなり急で、深いことがわかった。し かも、遺構の立ち上がりの壁面は不整形で、底も特に硬化したり平にされた様子はない。遺構 からは,特に性格がわかるような特徴は発見できなかった。土層の観察からは,基壇との直接 の切り合いはなく、その新旧関係は不明である。遺構の最上層からは、多量の瓦と少量の土器 (PL.17-13 等)が出土した。この層は、下層の土層とは違ってローム粒子が含まれ、汚れている ことから、基壇上の建物の壊れた屋瓦がまわりより低くなっていた土壙の上に、搔き集められ た際に形成されたものと考える。また、この土層の下層からも少量ではあるが、瓦は出土して いる (PL.7-6等)。他に、土壙の最下層からは、PL.17-6、7、8、9、10の土器が出土して いる。これらの土器は、成東町真行寺廃寺跡の創建以前の住居跡から出土した土器によく似て おり、その時期は7世紀後半とされている。本廃寺跡から出土した土器もその頃に製作された ものであろうか。しかし、土壙の掘削時期をこの土器から求めるには、次の点も考慮しなければ ならない。土壙の覆土下層にも瓦が含まれていることから、土壙に土砂が堆積し始めたのは、 本廃寺に瓦が持ち込まれてから後のことである点。しかも、この遺構が基壇のすぐ北側に位置 している点。この周辺は、本廃寺跡以前の遺構が少ない点。土壙の最下層から出土した土器が、 土壙掘削後長い間放置されていた状態のなかで入ったとは思えない点。以上の点を鑑みて,こ の土壙は、土器の年代を上限とした頃に、基壇の構築に伴って掘削されたのではないかと考え る。しかし、その時期は、土器の年代だけではなく、本廃寺所用瓦の年代も考えなくてはなら ないので、この点については、後述する。

3. その他の土壙 (PL.5 参照)

調査区内からは、他にも SK-1と同じような遺構を検出した。これらの遺構は、形が不整形で その大きさは、掘りあげてみないのでわからないが、以下にその概要を記す。

SK-2 (PL.5-1) 基壇の東側で検出した土壙である。形はかなり不整形であるが、おおよその大きさは検出面で東西約7m、南北約10m ほどと思われる。ボーリング調査から、深さは1m 以上になると思われる。

SK-3 基壇の南側で検出した。詳しいことはわからないが、SK-1同様に基壇から非常に近いことが注目される。

SK-4 (PL.5-2) 基壇の北側,4G-94付近で検出した。覆土の状態は,焼土や粘土粒・ローム土がブロック状にかなり混じっており,堆積状況からも,この土層は自然堆積ではなく,人為的な埋め戻しによるものと考えられる。形状は SK-1に似ており,これらの土壙の性格を考える上で重要なことと思われる。土層断面から出土した瓦は,PL.15-1 のほぼ完形に復元できた女瓦の隅切瓦である。

SK-5(PL.5-3) SK-2 のさらに東で検出した。検出面では、かなり瓦が出土した。また、PL.17-11 の土器が出土している。試掘から深さは、1m ほどであるがその他遺構の詳しい事は確認できなかった。

^{*} 今泉 潔・小林清隆他 『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』 財団法人千葉県文化財センター 昭和59年3月31日

4. 溝 (PL.6 参照)

今回の調査では、5条の溝を確認しているが明らかに基壇に伴うと確定できるものはない。 ここでは基壇に関係ある可能性が高く、貴重な遺物の出土した SD-5 について説明する。

SD-5 (PL.6-1, 2, 3) 基壇の西側で検出した溝である。幅は上端で70cm, 深さ20cmほどの浅い溝である。初め、3H 区で確認したので,その走行方向を調べた。その結果,SD-2のすぐ南で溝が切れることを確認した。SD-2 は,新しい時期の溝と考えられ,関連はないと思われる。また南は,基壇の西側まで続いていることが確認できた。しかし,基壇の北方では,確認できなかった。2G-99では,農耕で深く掘り返された所から「髙罡寺」の墨書がある土器 (PL. 17-1) と女瓦 (PL.13-1) が出土している。

5. その他の遺構 (PL.6 参照)

上記の遺構の他では、性格のはっきりしない落ち込みがある程度であり、ここでは特殊な遺構 SX-1 と竪穴住居跡ついてふれておく。

SX-1 (PL.6-3) 基壇の北東方約20mの5I-07付近を中心にして検出した遺構である。この遺構は、明らかに盛土が行われている。盛土はローム土を主としたものであるが、さほど締りのよい層にはなっていない。盛土の下には旧地表土と思われる暗褐色土層があり、盛土は厚さ7cm程の層で2、3層が確認できた。しかし、その広がりは今回の調査では捉えられなかった。また、この盛土の北側には愛宕神社の参道があり、その道を造る際に、掘り返した土を跳ね上げたものかもしれない。このことに加えて、この付近から瓦が特に多く出土した訳でもないので、この遺構の上に蓋屋に瓦を葺いた建物があったとは考えられない。しかし、立正大学の調査結果からは、この付近に講堂跡があるので、その点さらに検討が必要である。

SI-1 (fig.3) 基壇の南東方の5J-46区を中心に発見された竪穴住居跡と思われる遺構である。覆土の上面からは fig.3 の土器が出土しており、古墳時代前期に属するものである。調査区の他の地点からも同時期の土器が、ごく少量ではあるが出土している。しかし、前にも記したようにこの時期には、本廃寺跡周辺ではこの時期の遺構の分布密度は薄く、大きな集落があったとは考えられない。

SI-2 (PL.6-4) 3H 区内で検出した SD-5 を,基壇の西側でも確認するために設定したトレンチ内で発見した竪穴住居跡と思われる遺構である。丸子 亘氏の調査でも本廃寺跡の周辺で竪穴住居跡の発掘調査が行われており,今回も調査に入る前から,本廃寺跡に関連した住居跡が発見できると考えていたが,実際には調査で検出できた住居跡は,SI-1 を含めて 2 軒だけであった。この住居跡は,明確な年代を決定する資料には欠けてはいるが,おそらく先の調査で発見された住居跡の位置及びその時期を考えると,この住居跡も本廃寺跡創建期よりも新しいものであろう。

^{*} 丸子 亘 「長熊廃寺周辺古瓦出土住居址二例」『銅鐸』第14号 立正大学考古学会

丸子 亘 「千葉縣印旛郡和田村熊野神社前の土師住居址発掘報告」『文学部論叢』第1号 立正大学文学部

IV 遺物出土状況

今回の調査では、各地点から瓦・土器・瓦塔等の遺物が出土しているが、ここでは主要なものについて説明を加える。なお、瓦の分類は後述による。また、鐙瓦・宇瓦は、瓦当面が遺存するものに限定して、成形及び調整技法から鐙瓦の女瓦部・宇瓦の男瓦部とわかるものについては省いた。

1. 主要遺物出土状況 (fig.9 参照)

鐙瓦 (PL.7, 8) 鐙瓦 I 類は34点・重量3,832g が出土しており,主に基壇周辺部から集中して出土している。鐙瓦 II 類は,18点・2,506g が出土している。基壇近くからも出土しているが,発掘区の周縁部に散在する点は,鐙瓦 I 類にはみられなかった特徴である。鐙瓦III類は,2点・119g が基壇の南東部のピットと基壇の北西隅近くから出土している。

字瓦 (PL.9,10)出土点数37点・5,796g ある。字瓦 I 類は,本廃寺跡から出土する字瓦の大多数を占めるが,出土地点はほぼ基壇周辺に限られる。1点,小さな破片であるが,SK-1の覆土下層からも出土している。字瓦 II 類は, 2点・151g が出土している。出土地点は, 2点とも,基壇の北東方 SX-1の近くである。丸子 亘氏の基壇北西方の住居跡の調査からも出土している。立正大学の調査を含めても,今のところ基壇周辺からの出土はない。基壇から離れた地点に散在する点は,鐙瓦 II 類と似た傾向を示している。他に,分類できない不明なものが 1点5156から出土している。

瓦塔 (PL.16) 瓦塔は、発掘調査で5点が出土し、2点は調査区から北西方の畑で表採したものであり、都合7点について報告する。発掘調査で出土した5点のうち3点は、表土層ではあるが、それぞれ基壇の東側・南側・南東部から出土した。残り2点のうち1点は、基壇の南東方 SI-1を検出した地点から出土した。もう1点は、基壇北西方の SD-5 検出面から出土している。立正大学の調査でも、7点以上の瓦塔片が出土しているようである。昭和26年度には、基壇南側から4点が出土している。翌年度の調査では、数は不明であるが、『金堂と塔との中間瓦溜と講堂東側より瓦塔片出土』と記されていることから、基壇東側からも出土したようである。また、愛宕神社参道脇の『南大堀第一号住居址』からも出土している。それらを総合して考えると、多くは基壇の近くから出土しており、瓦塔がこの付近に安置されていたと想像できる。しかし、基壇の東と北西から出土した瓦塔片も、基壇周辺から出土したものと同じ個体なのかについてはよくわからないが、基壇が1基しかないことから、基壇周辺に置かれていた瓦

^{*} 丸子 亘 「長熊廃寺周辺古瓦出土住居址二例」『銅鐸』第14号 立正大学考古学会 昭和33年7月 なお、報文には「南大掘第一号住居址は、講堂西南隅から北に七・二五米、西に四七・一米の地点にある。・・ (筆者省略)・・南大堀第二号住居址は更に西に五五尺離れているわけである。」と書かれており、おそらく今回 調査した基壇の西方にある『住居ノ址』の石碑(PLAN 1参照)の付近にこれらの住居跡は、位置するであろう。 丸子 亘「千葉縣印旛郡和田村熊野神社前の土師住居址発掘報告」『文学部論叢』第1号 立正大学文学部 昭和 28年11月30日

^{**} 久保常晴他 「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」『銅鐸』第9号 立正大学考古学会 昭和27年3月

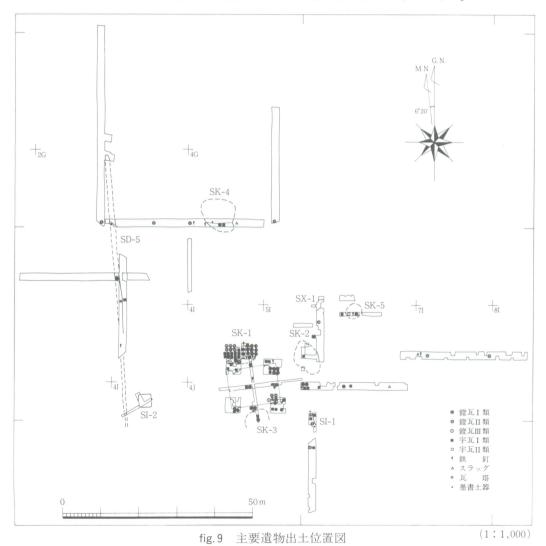
^{***} 久保常晴 「千葉県印旛郡長熊廃寺講堂・塔址」『日本考古学年報』5 日本考古学会 昭和32年3月31日

塔が散在したものと考える。

墨書土器 (PL.17-1, 2, 3, 4, 16, 22, 23) 7点出土している墨書土器は、「髙罡寺」の銘がある土器が SD-5の2G-99区から出土し、須恵器の底部に解読不能な墨書がある土器は SK-4 の焼土や粘土混じりの層の上層から出土している。他の墨書土器は、基壇の南西部付近から出土している点が目立つ。

鉄釘 (fig.19) 鉄釘は、12本出土している。そのうち 5 本が、SK-1 の覆土最上層の瓦集中土層からの 1 本も含め、基壇の北側から出土していることが目立つ。しかし、このことを根拠として、建物が北に倒壊したとは言いきれないであろう。

スラッグ他 (PL.17-24, 25) スラッグ 3 点と窯壁 1 点が出土している。出土位置をみても、点数が少なく特に偏りはみられない。しかし、おそらくこの近くに、製鉄に関係する遺構があるのではないかと思われる。本廃寺跡の周辺の斜面部には、製鉄に関係する遺構ばかりだけでなく、いまだ不明な、本廃寺所用瓦を焼いた瓦窯跡などもあるかもしれない。



— 11 —

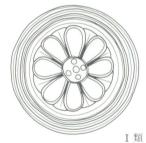
V 出土遺物

1. 瓦 (PL.7~15 参照)

今回の調査で、基壇建物の屋瓦が、出土しているので、以下その説明を記す。

本廃寺跡からは、3種類の鐙瓦が出土しているので、便宜上それらをⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類とし て扱う。以下宇瓦も同じである。

1.5 cm ほど直立した周縁に三重圏文を巡らした八葉単弁のものである。中房には、1+4の蓮 子が置かれ、中心蓮子をやや高く表現している。花弁は彫りが深くふっくらとして、弁端は反 転せず円形になる。花弁中央の蕊は表現されていない。間弁は楔状に配置され,花弁を囲むよ うに表わされている。また、間弁の中央は、窪んでいる。男瓦との接合は、fig.10に示したよう になる。笵に内区の部分の粘度を打ち込み、その上に男瓦をあわせ、周縁部に粘度を充填して、 最後に男瓦を瓦当部に接合させるための粘土を補塡する。PL.7-1 は, 灰白色で胎土も良いが焼 成は甘い。周縁での推定径は16.4cmになる。瓦当部と男瓦との間には、隙間があったらしく男 瓦広端部にのこっていた糸切り痕が波打っている。PL.7-2 はグレーで硬く焼締っている。裏面



には、男瓦を接合する時につけられたと思われる、幅1cmの溝が深 さ 5 mmほど残っている。PL.7-3 は、茶褐色に焼き上がっている。PL. 7-4 は、男瓦部先端が瓦当面の内区と周縁境の溝に一致しているも のである。周縁は、PL.7-5のように二重圏の破片もある。

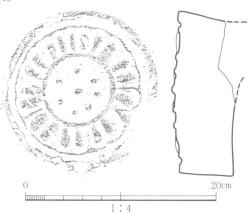


I類

八葉単弁蓮華文のものである。周縁は素文で、1.5cmの高さがあ る。周縁と内区の間には、幅7mm、高さ5mmの段がついている。花 弁は二通りの表現がされている。一つは笵の彫りが浅く中央部がや や広くなり、中央に細線で稜が表現されている。ほとんどの花弁は この形である。もう一つは, 先のものに比べ狭長で弁端が反転して おり、稜がない。この種の花弁は、笵キズを頼りに確認したところ この一葉だけのようである。今回の出土品のなかには、中房の全体 がわかる資料はないが、さほど大きくはなく、蓮子は1+7のよう である。男瓦との接合は I 類と同じである。また、 笵も I 類同様に 周縁までおよんでいる。PL.8-1 は、褐色で焼成は甘い。天部のみ遺 存する。周縁と段の間に鋭い工具の痕跡がある。男瓦との接合は弱 く, 男瓦の先端が三角形になって遺存する部分がはずれる(PL.8-参 照)。PL.8-3は、中房が一部残る資料である。蓮子数は不明である。 fig.10 鐙瓦模式図(火) 瓦当裏面と側面は丁寧に削られている。PL.8-4は、笵にキズがあ

る。一箇所は幅広の花弁と間弁の間,段の下のところにある。もう一箇所は,間弁の先の段についている。PL.8-5 は,男瓦との接合がよくわかる資料である。男瓦は,瓦当部の内区端の高さで接合されている。男瓦の先端と下面の補充粘土が剝れたところには,粘土板を作る際の糸切り痕がついている。また,男瓦側面の一部を削りとっているところも観察できる。

PL.8-7 は、周縁がかけているが、花弁と中房の一部がわかる。花弁は単弁のようで、弁は短く彫りも浅い。蓮子数は不明である。裏面は剝れている。PL.8-8 は、黄褐色で焼成は甘い。周縁は、さほど高くなく、丸くなっている。花弁と花弁の間に間弁のように盛り上がりがある。本類に属する鐙瓦は2点しか出土してなく、その全体は不明である。しかし、その特徴から常陸国分寺で出土している中房の蓮子が1+7で



複弁十葉蓮華文鐙瓦 (fig.11) によく似ている。 fig. | | 常陸国分寺出土鐙瓦拓影及び実測図

(2)字 瓦 (PL.9, 10) _{21.69kg} 字瓦 | 類 (PL.9) _{95%} 字瓦

外から内に向って波行する均正唐草文の宇瓦である。文様の基本は,三葉のパロメットと蕾からなる。文様は単純で,細い線で表現されているが,端から 4 回反転して中央で反対からのものとからみあうことにより,流麗な瓦当文様を作り出している。PL.9-1 は,瓦当面の半分が残る。文様と周縁の間には,高さ 1 mm,幅 1 mmの低い段がつき,宇瓦端の部分は三角に切られている。顎は緩い曲線顎であるが,凸面は一部ヘラケズリされているが,糸切り痕が残り,叩き締められたようすはない。また,瓦当面から 5 ~10cmの間に薄く朱が残る。この類のほとんどの宇瓦は,凹・凸面がヘラケズリされており,糸切痕が残りタタキのないことを確認できるものは少な

い。PL.9-3 も瓦当文様の半分以上がわかる。PL.9-7 は,瓦当面端の周縁が高い部分がよくわかる。

今回の発掘調査では、2点出土した。周縁は、高さが4mm、幅が8mmある。これらからでは、文様はよくわからないが、既出の資料(fig.13)からおおよそ見当がつく。それをみると、文様は珠文が2個並行して配置されているようであるが、全体の大きさは不明である。なお、これら宇瓦II類の胎土には、非常に多くの雲母が含まれている。



fig. 12 宇瓦 I 類瓦当文様模式図(%)



fig.13 既出の珠文字瓦(½)

^{*} fig.12の常陸国分寺出土鐙瓦の拓本及び実測図は今泉 潔氏より恵与されたものである。

^{**} fig.13の拓本は現物が不明なので、「千葉県印旛郡長熊廃寺跡発掘調査報告」『銅鐸』第9号より複写したものである。

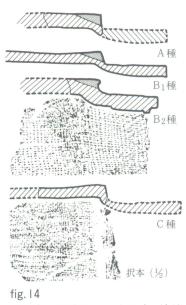
他に、1点だけ褐色で瓦当面の周縁部が一部残るものがある(PL.10-3)。凸面には糸切り痕が残り、胎土にも雲母が含まれていないので、宇瓦 I 類の可能性があるが、周縁の幅が 8 mmあり、文様が残るべきところにないので保留としておく。

(3)男 瓦 (PL.11) 83.95kg

男瓦は, 行基葺ものと玉縁付のものとに大別できる。

男瓦 | 類 (PL.11-6~10)77% 男瓦

無段の行基葺のものである。全体が窮えるような資料はない。PL.11-10 は、凹面に糸切り痕が強く残るものである。PL.11-7 は、粘土板の合せ目がよくわかる例である。PL.11-8 は、片方の粘土板が剝がれ糸切り痕が明瞭である。全体にこの類の瓦は、凸面の第2次成形が不明であ



男瓦II 類玉縁のつくり方(½)

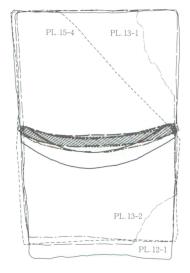


fig. 15 女瓦の比較(%)

男瓦川類 (PL.11-1~5) 23%

り、胎土には雲母がほとんど混じらない。

胎土に雲母が多量に含まれた玉縁付のものであるが、玉縁部の作り方から細分が可能である。A種:男瓦の本体と玉縁部が別々の粘土で作られるものである。接合部の肩に粘土を補充する。 B_1 種:玉縁部の肩に粘土をたすものであるが、本体の玉縁部は1枚の粘土板で作る。 B_2 種: B_1 種と基本的に同じであるが、玉縁部先端に窪みがあり、凹面の段の部分の布目はほとんど転写されていない。布目は粗い。C種:肩の所には補充粘土もなく、粘土板で作られている。凹面の段はかなり急になっている。布目は密である。PL.11-5は、凹面に布を綴じ合わせた箇所が見られる。

女瓦 | 類 (PL.12-1~7) 79% 女瓦

本類は、文様を彫ったり縄を巻いていないタタキ板を使用している。PL.12-1 は、凸面のタタキ板の痕跡が明瞭なものである。タタキ板は幅5cmである。また、凸面の側面近くには、側面を削る際に付いた工具のあたりが付く。凹面は、ナデられているようである。この類の瓦は、凹面の側縁の近くで布目が終ることや、布の綴じ合わせ・粘土板の合せ目がないことから一枚作りと考える。PL.12-5 は、凸面のタタキ板の痕跡がわかる拓影であるが、タタキ板の縁がささくれている。PL.12-4 は、明らかに凹面にタタキを行っている例である。この類の瓦が全て凹面にタタキをしているわけではないが、女瓦Ⅱ類には見られない。PL.12-2 は、凹凸両面に明瞭な糸切り痕

を残す。特に凸面の糸切り痕のところに本類によく見られる凸面に離型剤としての「離れ砂」が観察できる。これらの点から、本類の女瓦は、初めに凸型の上で形が整えられ、そのあとに、 凹型にのせさらに形を補正するために、もう一度ナデやタタキが行われたと考える。

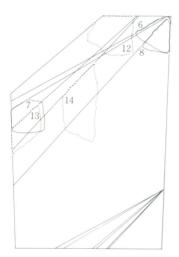
凸面に縄目のタタキ痕がつくものである。本類は、女瓦 I 類の胎土とは明かに違い、雲母が多量に含まれる。PL.13-1 と 2 は、ともに全体がほぼわかる資料である。これらを比較すると大きさはほとんど変わらないが、タタキ締め方、縄の太さが若干違うようで、本類はさらに細分が可能かもしれない。2 の凹面広端部近くには、布の端が見られる。PL.14-1 は凹面の側縁近くに布の端が見られる。PL.14-3 も凹面側縁近くに布の端が見られ、凸面には、縄をまいたタタキ板の大きさがわかるほど窪みがついている。PL.14-4 は凸面のタタキが交叉するものである。類例は少ない。本類は明かに一枚作りである。

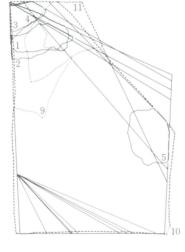
これら完形にちかい 4 枚の女瓦を比較してみると (fig.15), II 類の PL.13-1 と PL.13-2 は大きさはほぼ同じである。しかし, I 類の PL.12-1 はそれらよりも長い。また, II 類の PL.13-2 と同じ縄目のタタキ痕をもつ隅切瓦 PL.15-4 は大きさばかりではなく断面の厚さもよく似ている。これは, I 類と II 類は明かに別の工人が作ったものであり, II 類の PL.13-1 と PL.13-2 がすこし違うのは,工房は同じであるが,工人が違うことの現われかもしれない。

(5)隅切女瓦(PL.15)

今回の調査では、隅が切られた女瓦が出土している。以下に女瓦の分類に従って説明をする。 **隅切瓦 | 類** (PL.15-1~3)

本類は、女瓦 I 類の広端部隅を切りとって作られたもので、8点出土している。隅を切る角度は、かならずしも一定していない。本類に属する瓦は、切られた面と狭端面がなす角度は45





番号	女瓦	角度	備考
1	I類	23	PL.15-2
2	11	27	
3	11	29	
4	11	30	
5	"	45	PL.15-3
6	"	29	PL.15-1
7	"	30	
8	"	48	
9	II類	48	PL.15-6
10	"	49	PL.15-4
11	"	64	PL.15-5
12	"	41	
13	"	43	
14	"	47	

fig. 16 隅切女瓦の比較(%)

tab.1 隅切女瓦計測表

- * 瓦の製作技法については、宮本敬一・今泉 潔 両氏から多くの示唆に富む御意見をいただいた。
- ** 立正大学の調査では、隅切宇瓦も出土している。 久保常晴他 「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」『銅鐸』第9号 立正大学考古学会 昭和27年3月

度と48度のものがある他は、31度以下である。また、広端面が残る瓦は1点のみで、他はすべて隅が三角形に切り落されている。

隅切瓦Ⅱ類 (PL.15-4~6)

女瓦II類の瓦を加工して隅切瓦としたもので、6点出土している。本類は、広端面の一部をかならず残している。今回の資料の中には、I類のように先端が三角形になるものはない。また、切られた面と狭端面がなす角度は、すべて45度以上である点もI類とは異なる点である。このように、隅切瓦I・II類はそれぞれに特徴をもち、女瓦同様に別々に作られたと思われる。以上説明した隅切の女瓦は、広端部がのこって明かに隅切女瓦とわかるものに限られてしまったが、おそらく狭端部資料も出土しているとも思われ、発掘面積のわりに、隅切瓦が多いことは、本廃寺跡出土屋瓦の特徴である。出土地点は、基壇周辺部に多い。

今回の調査では、軒先瓦と隅切女瓦の他に、別な種類の道具瓦は出土していない。

2. 瓦 塔 (PL.16 参照)

今回の調査では、瓦塔片が7点出土している。うち4点は屋蓋部で、3点は斗供の部分になると思われる。軸部、相輪部等は出土していない。また、塔以外に堂は出土していない。

屋蓋部 (PL.16-1, 2, 3, 4)

PL.16-1 は,瓦塔の屋蓋部である。瓦の表現は,幅 1 cm,深さ 5 mmの断面半円形の男瓦の表現だけである。 $2.5\sim3$ cmごとに行基葺を思わせる段が付けられ,軒先は若干反りがつく。また,段がつく窪みのところには工具のあたりが残る。下棟も断面はほぼ半円形に作られており,軒は,二軒で構成されている。垂木の下面と軒先には朱がついている。基壇東側出土。須恵質で灰色。PL.16-2 も屋蓋部であり,PL.16-1 と同じ作りである。須恵質に焼き上り青灰色を呈する。裏面には須恵器甕の内側に見られるような当て具の痕が弱く残る。男瓦の表現は,PL.16-1 に比べて浅い。基壇南東隅出土。PL.16-3,4 は,調査区北西方の畑で表採したものである。ともに屋蓋部の軸部に接する部分で,須恵質で白色を呈しており同じ個体かもしれない。男瓦の表現は,前の 2 点に比べると,幅が $1.3\sim1.4$ cmほどあり,やや幅広になる。

斗 供 (PL.16-5, 6, 7)

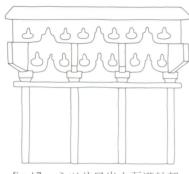


fig. 17 ミツサワ出土瓦塔軸部

PL.16-5 は,青灰色を呈し,3H-91 から出土した。PL.16-6 は白色で 4J-38 から出土した。これらは,斗供の部分で軸部と平行におかれる三斗になる。PL.16-5 は,右側の割れ方と上下面のようすから壁付の三斗を表現したものである。PL.16-6 は,上下面の一部に剝離痕を残すが,壁面に垂直な斗供が剝がれたようすがないことから手先の三斗を表わしたものと思われる。PL.16-7 は,5J-46 から出土した。色は青灰色。左右の面はナデ,ヘラケズリで仕上げられている。

^{*} fig.17は、神奈川県ミツサワ出土とされているものである。三斗組の表現の参考とされたい。下記の文献から転載。 松本修自「小さな建築」『文化財論叢』奈良国立文化期研究所創立30周年記念論文集刊行会 昭和58年3月30日

先端と上方のカーブを描く面には、朱がつく。下方のえぐれている部分には朱はない。壁面と垂直な斗供で、PL.16-5 に垂直に付く部分になると思われる。しかし、三斗を表現しているもので、下方にもえぐれがあるものは知られていないようなので、断言はできない。

3. 土器他 (PL.17 参照)

各トレンチから土器、鉄釘等が出土しているが、主要なものについて説明する。

(1) 土器 (PL.17)

PL.17-9, 10, 11 は,内面があれているので,脚部と考えた。逆に PL.17-8 は,内面に丁寧なミガキが施されており,高杯の上部と考えられる。PL.17-7 は,脚部であるが,四方に長方形の透孔が入る。PL.17-6 は,盤状を呈する。下面はヘラケズリが行われる。PL.17-6 と 7 は,胎土がよく似ている。これらの土器は特異な形を呈しているが類例が少ない。真行寺廃寺跡出土土器の年代から 7 世紀後半代の所産と考える。PL.17-6~10 は SK-1 の下層から出土。PL.17-11 は,SK-5 の上層から出土したものであるが,SK-1 の土器と同じ時期のものであろうか。PL.17-16 は,SK-4 から出土した須恵器杯で,底部に墨書がある。

(2)墨書土器 (PL.17)

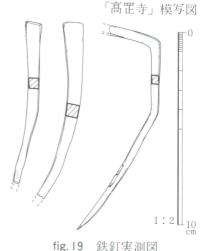
今回出土した墨書土器は、6点あるが、解読できるものは1点だけである。 PL.17-1の杯は、外面ヘラケズリ、内面は不定方向のヘラミガキがおこなわれ浅い 盤状になったものである。8世紀前半の土器と思われる。この土器の口縁部の下方に、墨書がある。墨書は、「高罡寺」と書かれており、「髙」の字は一の下が「目」にちかい。「罡」は「岡」の旧字体である。すぐ近くに高岡の地名があり、関連が注目される土器である。 fig. 18

(3)鉄 釘(fig.19)

鉄釘は10本出土している。fig.19-1は,SK-1の瓦集中層から出土したもので上部が90度曲がっている。他に細いものが3本ある。残りは,fig.19-2,3と同じである。

(4)スラッグ他 (PL.17-24, 25)

スラッグが 3 点と炉壁が 1 点出土している。PL.17-24 は,6J-01 から出土。鍛冶椀形滓と思われる。重さは132.8 g ある。PL.17-25 は,7I-60 から出土している。炉壁の一部 と思われる裏面の粘土部分には赤変部はみられず,平滑なので,他に利用したのかもしれない。重さは,114.9g ある。他の 2 点は,重さが90.2g と36.5g ある。



* 今泉 潔・小林清隆他『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』 財団法人千葉県文化財センター 昭和59年3月31日

^{**} PL.17-1'は赤外線フィルム使用。PL.17-1''は赤外線カメラでみた像を普通のフィルムで撮影したものである。

^{*** 「}罡」の字は,坪井良平「異体文字雑考」(四)『古代研究』第23号(財)元興寺文化財研究所考古学研究室昭和56年11月1日を参考とした。

^{****} スラッグについては、山口直樹氏の御教示を得た。

VI ま と め

今回の調査で、本廃寺跡の全容が解明できたわけではないが、調査及び整理作業で気づいた 点を記してまとめにかえたい。

1. 遺 構

検出した遺構は、基壇1基、土壙5基、竪穴住居跡2軒、溝5条であるが、基壇と土壙についてふれておく。

(1)基 壇

先にも記したように基壇は、掘り込み作業を行ったもので丁寧な版築によって造られている。その版築の範囲から推定できる基壇の規模は、 $12.6 \times 9.4 \text{m}$ であるが、問題となるのは、建物の大きさである。建物の大きさを決めるには、柱の位置がわかることが重要であるが、軒下の雨落ち溝等が発見されればおおよその見当がつく。本廃寺跡からは、柱位置がわかる箇所や雨落ち溝等は発見できなかった。しかし、建物を新築したり修理する際に使用された足場の柱を固定するためのピットが発見できた。普通、足場は軒先に組まれるようであるから、本廃寺跡の場合も同様であったとすれば、建物の軒先の位置は、ほとんど基壇の端と同じか基壇より少し出る程度だったことになる。そうすると軒先の位置から考えて、建物の身舎は、せいぜい 2×3 間程度ではなかったかと考えられる。

先の調査では、この基壇を伽藍中心の金堂跡と考えていた。しかし、本廃寺跡には基壇を伴うような建物跡は1堂のみであり、周辺からは瓦塔片も出土しているので、この建物は、その内に瓦塔を安置した「お堂」であったろうと推測するに留める。

(2)土 壙

今回の調査では、土壙が5基検出できた。これらの土壙の中で、底まで下げたのは3基の一部だけで、遺構の全体は不明であるが、不整形な大穴であることに間違いない。SK-1とSK-3は、基壇から非常に近い所に位置しており、基壇版築のためのローム土を掘削した穴の跡とも考えられる。SK-1からは、7世紀後半代に使用年代の一点がある土器が出土している。調査区内では本廃寺跡以前の遺構はなく、周辺からの混入とは考えにくく、これらの土壙がローム土を得るための採掘抗だとすれば、この土器の年代は、本廃寺の創建の年代の上限を示しているものと思われる。

また、SK-1 は覆土上層に瓦が集中しており、その下層にも瓦が若干入っている。SK-4 にも埋め戻しの土の中に、ほぼ完全に復元できた限切女瓦が入っていた。大量の瓦や完形の瓦等は、建物の修理で不要になったか倒壊時に投棄されたと思われるので、本廃寺跡の存続期間中これらの土壙は掘削されたままになっていたと考えられる。しかし、どのような目的のために、基壇のすぐ横にも大穴が放置されていたのかは不明である。

^{*} 平城宮等で確認されている。『平城宮発掘調査報告』XI 奈良国立文化財研究所 昭和57年1月30日

^{**} 多賀城跡の築地でも確認されていることを、阿部義平氏より御教示を得た。

2. 遺物

出土遺物のなかで特に目に付いた屋瓦、瓦塔、「高罡寺」銘墨書土器について考えてみる。

(1)鐙 瓦

本廃寺跡出土の鐙瓦 I 類は,周縁に三重圏文を巡らし,内区に八葉単弁の蓮華文を配しており,所謂山田寺系の古瓦に属するものと思われる。現在のところ房総では,山田寺系鐙瓦の出土は10箇所で知られている (fig.20 参照)。これらのなかで様式上,最も古いのは,龍角寺のものであろう。龍角寺の鐙瓦の特徴は,蕊の表現が肉厚であり山田寺のものに似ていることである。二日市場廃寺跡や龍正院から出土しているものは,龍角寺のものに比べ蕊はやや細くなるが男瓦の接合位置はまだ高い。しかし,木下別所廃寺跡や法興寺出土品は,男瓦の接合位置がかなり下がっている。しかも,木下別所廃寺跡のものは,蕊の表現がかなり細い線になっている。また,名木業寺跡出土のものは,周縁は二重圏文になるという文様の退化が見られる。本廃寺跡のものは,花弁はふっくらしているが,蕊がなく,男瓦との接合位置も下がっている。さらに間弁は,他の山田寺系の鐙瓦とはまるで違い,中央部が窪み花弁を囲むように表わされている。このような特徴から,先の流れのなかでは,龍正院や二日市場廃寺跡のものよ

りも新しくなると思われる。 龍角寺は、おそらく7世紀後 半代に創建されたと思われる ので、本廃寺跡の鐙瓦の製作 年代は、それよりも新しく8 世紀前半代としておく。

鐙瓦II類は、男瓦との接合や瓦当面側面を丁寧にヘラケズリすることは鐙瓦I類と同じことから同時期のものと考える。しかし、似た文様の鐙瓦はなく、直接の系譜は辿れない。

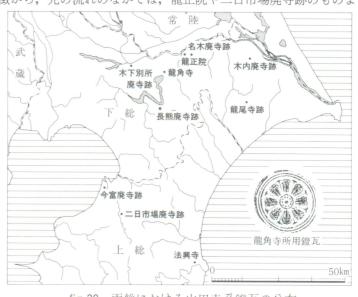


fig.20 両総における山田寺系鐙瓦の分布

- * 安藤氏は房総北部に多く分布するこれらの瓦を、蘇我氏に関係づけて理解しようとしている。 安藤鴻基 「房総七世紀の一姿相」『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会 昭和55年 10月25日
- ** 滝口 宏 『下総龍角寺調査報告』 千葉県教育委員会 昭和47年3月日
- *** 最近の山田寺の調査では、「山田寺」式鐙瓦は大きく3群に分けられ、龍角寺のものは第2群:蓮弁が盛り上がるだけで、輪郭を示す線がなく、間弁が中房まで達するものに属する。 『山田寺展』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 昭和56年10月6日
- **** 郷堀英司他 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会 昭和59年3月31日
- ***** 坂詰秀一他 『下総・龍正院瓦窯跡群』立正大学文学部考古学研究室 昭和59年4月10日
- ***** 滝口 宏他 『木下別所廃寺跡第1次発掘調査概報』千葉県教育委員会 昭和53年3月25日
- ***** 平野元三郎他『上総法興寺跡-第1次発掘調査概報-』 千葉県教育委員会 昭和50年3月31日
- ****** 沼沢 豊他 『名木廃寺跡確認調査報告書』 千葉県教育委員会 昭和50年3月31日

しいて類例を求めるならば、滋賀県衣川廃寺跡から出土している素文縁複子葉弁鐙瓦とされているものがある衣川廃寺跡のものは、素文縁と内区の間に段がなく、花弁中央の蕊の両側には子葉が二枚表現されている。また、間弁にも中央に稜がついている。

鐙瓦Ⅲ類は、常陸国分寺から出土しているものと同じ文様のものである。この鐙瓦は、常陸国分寺では創建期の所用瓦ではなく、早くとも8世紀後半代のものであろうと思われる。

(2)宇瓦

宇瓦 I 類の文様は,所謂,パロメット文で構成されている。普通,パロメットをモチーフとした宇瓦は,七葉ないし五葉のものと,その半分にした半截忍冬文と呼ばれているものと 2 種類ある。本廃寺跡出土のものは,三葉のパロメットであり,前者の流れをくむものである。この文葉は,言うまでもなく,中国及び朝鮮半島から日本に伝わったものである。fig.21-1・3 は平壌の近くにある高句麗時代の遇賢里大墓の墓室壁面に描かれたものであるが,パロメットの特徴をよく表わしている。fig.21-2 は,同じく慶州にある雁鴨池から出土したものであるが,文様は,半截忍冬文を反転させたもので,文様の流れ方は,本廃寺跡から出土したものとよく似ている。しかし,* * 5 * 5 * 67 で見るとこの文様は,肉厚な表現であり,本廃寺跡出土品のような細い線で表現されたものではない。fig.22-4 は,大和法隆寺から出土したものである。内区の文様









fig.21 パロメット文宇瓦類例 (拓本%)

は中央に中心飾りをもち、文様は外行するものであるが、外区には珠文及び鋸歯文帯がある。パロメット文は三葉となり、7世紀末葉の年代があてられている。この宇瓦のパロメット文は、本廃寺跡のものによく似た感じを受けるが、本廃寺跡出土のものは、三葉パロメットの先端が尖っている。この宇瓦も鐙瓦II類同様にその関係を系統立てて説明できないので、それらから一概に年代を導くことはできないが、ここでは一応法隆寺のものよりは新しいと考える。

- * 藤沢一夫他 『衣川廃寺発掘調査報告』滋賀県教育委員会 昭和50年3月日
- ** 『朝鮮古蹟圖譜』 二 朝鮮総督府蔵版 大正4年3月31日
- *** 『新羅 의 기와』韓国建築史大系V 建築과 文様 上巻 東山文化社 1976年5月6日
- **** 『雁鴨池』国立中央博物館 1980年11月20日
- **** 型式番号6730A 『南都七大寺出土軒瓦型式一覧』(1)法隆寺 奈良国立文化財研究所 昭和58年3月31日
- ***** 增田精一他『東岡遺跡』九重廃寺跡調査報告 茨城県新治郡桜村教育委員会 昭和59年3月31日

(3)男瓦

男瓦は、行基葺用と玉縁付の2種類が出土しているが、ここでは、本廃寺跡出土男瓦II類の行基葺男瓦の製作技法を中心に考えてみたい。

本廃寺跡出土の玉縁の段のところは、非常に薄い特徴をもつが、その玉縁部の作り方から、 3種に細分した。 $A \cdot B$ 種は玉縁部の肩を補充粘土で作るものである(PL.11-4)。A種は、先 ず型に本体部分の粘土を巻きつけ、肩の部分を補充し、一度回転を利用して成形されたようで、 玉縁部が剝がれたところでもヨコナデが観察できる。B,種は、玉縁がつく凹面の段のところで 布目がほとんど確認できないものもある。この種の玉縁肩の稜の部分が玉縁端部方向にはみ出 しているものがあり、力の入れ方が型の方向に向かってなく、広端部の方向に向いていたと思 われる。凹面に布目が転写しにくいのはこのためであろう。С種としたものは、肩の部分の補 充粘土がないものである。点数が少なく、よくわからないが、他の種に比べさらに玉縁部が薄 く、そこでわれるものがほとんどである。A種に見られるような粘土の合せ目、剝離痕は見ら れなく、玉縁凹面の段がつくところが、前種に比べて深いのは、一枚の粘土板で玉縁の肩の部 分も作らねばならないためであろう。前種のように撫肩の型ものでは、C種のように一枚の粘 土で玉縁の肩の部分は作りにくく、本種の製作された型が、段の明瞭であった訳はそのためで ある。本廃寺跡の男瓦II類は、すべて胎土中に雲母を含み焼成も似ていることから、同時に焼 かれたものと考える。その年代は、明らかにすることはできないが、男瓦II類を使用した鐙瓦 がないことは明かであり、創建期にこれらの男瓦が所用されたかどうかはわからない。また、 雲母を多量に含む女瓦Ⅱ類との関係であるが,両者の胎土はよく似ているが,焼き上りかたが まるで違う。

(4)女瓦

女瓦は、タタキから大きく2類に分類した。女瓦 I 類は、一枚作りと思われるが、特殊な作り方をしているようなので取り上げてみたい。

女瓦 I 類は先の記述では、粘土板の合せ目がないこと、側縁に布の端があること等から一枚作りとしたものである。ここでは、凹面にも「タタキ」が見られる点についてふれておく。この場合の「タタキ」は、粘土の空気を締出すようなものではなく、形を補正する程度のものと思われる。女瓦 I 類は、まず凸型の上で叩き締めが行われ、その後再び凹型の上でも「タタキ」が行われたと思われる。凸面についている「離れ砂」は、凹型の上で叩き締めを行う際に型から瓦をはずしやすくするための剝離剤と考えられるのである。

宇瓦 I 類は、凸面が丁寧にヘラケズリされており、成形技法がわかる資料は少ないが、確認できた宇瓦は、両面に糸切痕があることから、製作は女瓦 I 類と同じ工人集団ではないかと考える。またこのことから、当初から宇瓦用に瓦当部を厚手に製作していたことがわかる。

浦林亮次「瓦の歴史-法隆寺遺瓦群における技術史的-試論」『建築史研究』28 建築史研究会 昭和35年4月

^{*} 浦林亮次氏の下記の文献を参考とした。

^{** 「}平城宮発掘調査報告書』IX 奈良国立文化財研究所 昭和53年3月31日 上記文献の中では、平城宮造営当初から凸面型一枚作りが行われているとされているが、大脇 潔氏の御教示によれば造営当初にも桶巻作りはあり、一枚作りの開始時期は確定されていないとのことである。

(5)瓦塔

今回出土した瓦塔片は少なく全体が伺えないことは非常に残念であるが、斗供部と思われる 破片が出土しているのでこの点を中心に考えてみたい。

本廃寺跡の斗供の破片は、壁に平行する三斗と、先の三斗及び壁から垂直にとびだす斗供と 思われる。先三斗と考えたものは、先にあげたミツサワの例や壁付三斗は省略されているが我 国瓦塔の代表例である東京都東村山の例をみると、軸部からのびる出桁につかなければならな い。しかし、本廃寺跡出土のものは、上面の剝離痕が1cmほどであり出桁についていたとは思 えない。この点については、瓦塔の細部はあまり知られていないので今後検討が必要である。

松本修自氏は、これら斗供部の表現から瓦塔の製作年代を求めようとしており、三斗組の表 現は、ミツサワのように三葉形のものから、逆凸形に変化するとされている。本廃寺跡出土の ものは、山形文になっており、三葉形のものよりは新しいと思われる。県内の例では、西方の ものが手先三斗はないものも、初層には明かに三葉形の三斗組が表現されている。

瓦塔が東日本に多く分布していることは以前からいわれてきたところであり、千葉県はその なかでも集中する地域の一つである。その分布は fig.22 に示したようになるが、特に印旛沼の 周辺に多いようである。本廃寺跡周辺でも六拾部遺跡と、現物の確認はしていないが六崎から



fig.22 房総における瓦塔の分布

も出土しているようであり、これらが何を意 味しているのか興味深い。なお、六拾部遺跡 のものは, 三斗組の表現が逆凸形である。

今回の出土品のなかには、 須恵器の当て具 の痕が残っているものもあり、相輪部のロク ロの使い方などからも、 瓦塔の製作は、 須恵 器人工と関係しているものと思われる。その 点、六拾部遺跡から出土した土器質のものは、 粘土紐づくりであり、須恵器工人作とは、思 えないもので,特殊である。

瓦塔の設立の意義については、 墳墓説や、 堂宇内安置説があるようであるが、本廃寺跡 の出土状況は、基壇上の建物のなかに安置し ていたことを示しているのではなかろうかと 思われる。

^{*} 下記の文献による。また、松本氏が言うように「分布状態からみて実際に伽藍を建立することが困難であった地 方において,とくに木造塔の代用として瓦金堂とセットで,私的なあるいは,小規模な集団の信仰の対となった。」 とされている点に注意しなければならないかもしれない。

松本修自「小さな建築」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 昭和58年3月30日 『小建築の世界』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 昭和59年4月18日

^{**} 石村喜英「瓦塔設立の意趣」『日本歴史考古学論叢』吉川弘文館 昭和41年11月

^{***} 藤沢一夫 「近江衣川廃寺の屋瓦と瓦塔」『衣川廃寺発掘調査報告』滋賀県教育委員会 昭和50年3月

fig.22	遺跡名		表	現	方	法	の特	徴		文献
番号	地 名	形	屋瓦		軒	斗供	その他	焼成	着色	註
1	結城市山川新宿		男瓦							1
2	成田市囲護台									1
3	公津原 Loc.14		男瓦							2
4	印旛村山田字浅間山	塔								1
5	印旛村岩戸字西方		男瓦		二軒					3
6	龍角寺	塔	男瓦と女瓦	(?)						4
7	木下別所廃寺跡		男瓦		一軒			土師質		5
8	大塚前遺跡									6
9	印西町浦部									2
10	佐倉市六崎	塔								1
11	長熊廃寺跡	塔	男瓦		二軒	\triangle		須恵質	赤彩	7
12	六拾部遺跡	塔	男瓦		一軒	П	相輪	須恵質		8
		塔	男瓦			斗供		土師質		
13	江原台遺跡	塔	男瓦		一軒			土師質		9
14	村上遺跡	塔	男瓦		一軒			土師質		10
15	白幡前遺跡	塔	男瓦		一軒	斗供	相輪	土師質		11
		堂	男瓦			斗供		土師質		
16	山田廃寺跡									1
17	真行寺廃寺跡		男瓦							12
18	下総国分尼寺跡									13
19	荻生道遺跡									14
20	千葉寺	塔	男瓦と女瓦		二軒				赤彩	15
21	谷津遺跡	塔	男瓦		一軒			土師質	赤彩	16
		堂	男瓦		一軒			土師質	赤彩	
22	孟地遺跡	塔	男瓦					土師質		17
00	# , 551#54	堂	男瓦					土師質		
23	萩ノ原遺跡	塔	男瓦		二軒		相輪	須恵質	赤彩	18
	to to provide the	堂								
24	東寺原遺跡	塔	男瓦					土師質		19
25	東郷台遺跡	塔	男瓦				相輪	土師質		20
	Andre serve North en A	堂	男瓦					須恵質(?)		
26	健田遺跡									21

tab. 2 房総における瓦塔(瓦金堂)出土地名表

☆ 献 。 註

- 1 高井悌三郎『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』綜芸社 昭和39年11月
- 2 天野 努他『公津原』II 千葉県教育委員会 昭和56年3月31日
- 3 滝口 宏他『印旛手賀』早稲田大学考古学研究室 昭和36年10月
- 4 滝口 宏『下総龍角寺調査報告』千葉県教育委員会 昭和47年3月
- 5 佐藤克己・高木博彦「木下廃寺の古瓦」『ふさ』第5・6合併号 ふさの会 昭和49年12月 滝口 宏他『木下別所廃寺跡第二次発掘調査概報』千葉県教育委員会 昭和54年3月25日 滝口 宏他『曽谷窪瓦窯跡発掘調査概報』千葉県教育委員会 昭和55年3月25日
- 6 大岩好昭・高木博彦他『房総の古瓦』千葉県立房総風土記の丘 昭和53年4月
- 7 本報告書
 - 久保常晴他「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘報告」『銅鐸』第9号 立正大学考古学会 昭和27年3月
- 8 昭和58年 財団法人千葉県文化財センターによる発掘調査。
- 9 海野道義他『江原台』江原台第1遺跡発掘調査団 昭和54年3月31日
- 10 天野 努他『八千代市村上遺跡群』房総考古資料刊行会 昭和50年2月
- 11 昭和58年 財団法人千葉県文化財センターによる発掘調査。
- 12 沼沢 豊他『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会 昭和57年3月31日
- 13 滝口 宏「国分寺造立の発詔」『市川市史』第2巻古代・中世・近世 吉川弘文館 昭和49年3月
- 14 今泉 潔氏から御教示を得た。
- 15 武田宗久「王朝時代」『千葉市誌』千葉市 昭和28年2月
- 16 池田大助・相京邦彦他「谷津遺跡の調査」『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書II』財団法人千葉県 文化財センター 昭和61年3月31日
- 17 市原市の「県立山倉子供の国」出土。宮本敬一氏より御教示を得た。
- 18 寺門義範・田口 崇『千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告』日本文化財研究所 昭和52年9月
- 19 豊巻幸正他「東寺原地区」『永吉台遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター 昭和60年3月31日
- 20 光江 章『東郷台遺跡』(川原井廃寺跡)財団法人君津郡市文化財センター 昭和61年3月31日
- 21 玉口時雄『健田遺跡発掘調査報告書』千葉県教育委員会 昭和50年3月 この地名表を作成するにあたっては、下記の文献によるところが大きい。
- ① 安藤鴻基「房総の瓦塔」『木下別所廃寺跡第二次調査概報』千葉県教育委員会 昭和54年3月25日
- ② 『小建築の世界』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 昭和59年4月18日 尚,銚子市立博物館蔵品については,出土地が房総でない可能性が高いので表から削除した。

(6)「髙罡寺」銘の墨書土器

最近の発掘調査で、現在残る地名を付けた寺銘墨書土器が若干出土している。「寺」の墨書の上に文字があっても、それが一概に地名とは限らない。しかも、当時の地名が、現在まで全て残っているとは、考えられないので、地名と寺名が一致することは、さらに少なくなる。成田市大袋遺跡からは、本廃寺跡出土の「髙罡寺」銘土器と似た器形の土器に「赤男寺」と書かれた墨書土器が出土している。これは、男→界と理解され、界の意味から、近くにある「赤坂」と関連付けて考えられている。また、佐倉市坂戸広遺跡からも「坂津寺」銘の墨書土器が出土しているが、「津」は現在の「戸」を表わしたものと思われることから、この周辺の現在の地名である坂戸と一致する。この遺跡の近くからは、多数の掘立柱の建物跡が検出されている。

そこで、問題となるのが、地名を付けた寺院の性格である。寺名に地名を付ける点から、その造営母体は、公的機関ではなく、ある程度限られた地域に根ざして造営されたことを示しているのではなかろうかと考える。しかし、紹介した遺跡には、少なくとも瓦葺の建物はないようで、この点本廃寺跡と同じくあつかうことができるかわからない。

3. 結 語

今回の本廃寺跡の調査は、短期間であり、発掘面積も少なく本廃寺跡の全容を明かにすることはできなかったのは言うまでもない。しかも以前の調査で言われていた塔・講堂等の存在が不明になってしまった。この点については、地区ごとの古瓦の出土量からもいえることであり本廃寺跡は、本格的な伽藍を備えた寺院ではなかったと思われる。また、本廃寺跡の創建年代は、鐙瓦等からは8世紀の前半代と考えられ、同じく8世紀前半代の「高罡寺」銘のある墨書土器があることからも、本廃寺跡は8世紀前半代の創建になると思われる。しかし、まだ平城宮でも桶巻作りが行われている時期であり、現在のところ、旧下総国においては、国分寺創建期以前に女瓦が凸型一枚作りによる明確なものは確認されていない。この点、これまで言われてきたように、国分寺造営に伴って一枚作りの技法が導入されたとすると、本廃寺跡例は房総で最も古い凸型一枚作り技法の女瓦となり、今後さらに検討されなければならない問題である。

立正大学の調査でも主要な遺物は出土していたが、今回の調査では、さらに資料が増え、鐙瓦・宇瓦はもちろんのこと、特殊な作りの男瓦や女瓦、斗供部と思われる瓦塔の破片が出土した。また、寺名が「高罡寺」と判明した墨書土器の出土は、大きな成果であった。しかし、まだまだ不明な点が多く、今後『高罡寺』がさらに解明されることを希望してまとめとする。

^{*} 新井和之他 『成田市 松崎白子,大袋台畑・塔之下遺跡』 成田市松崎・大袋遺跡調査会 昭和60年3月 29日

^{**} 渋谷興平・渋谷 貢『坂戸遺跡』坂戸遺跡埋蔵文化財発掘調査団・坂戸遺跡調査会 昭和61年2月15日

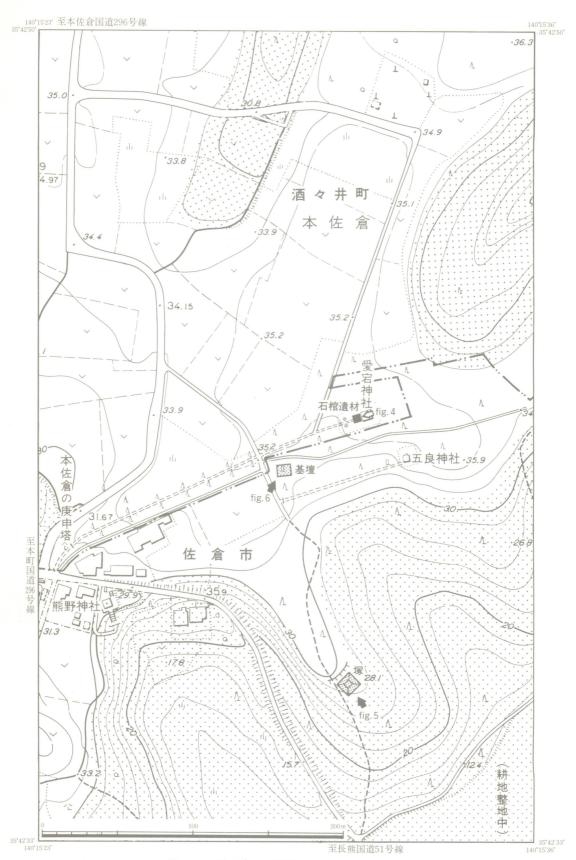
^{*** 「}津」は、上総国分寺跡から出土した土器に「潤津」というものがあり、これは現在の市原市潤井戸をさしていると考えられ、「津」が「戸」を示している例が県内にもあることを宮本敬一氏から御教示を得た。

^{****} 坂詰秀一氏は、堂一宇説であった。坂詰秀一「日本各地の寺院跡 関東」『仏教考古学講座』2 - 寺院 -

^{*****} 平城宮の瓦については、大脇 潔氏から御教示を得た。

図版・図面

- 1. 遺構写真のPlate 番号は、対向ページの実測図にも及ぶこととする。ただし、写真番号と実測図番号はかならずしも同じ遺構を示すとはかぎらない。
- 2. 遺物写真の Plate 番号は、対向ページの実測図にも及ぶことにする。ただし、写真を掲げず実測図のみ示すもの、実測図を掲げず写真のみを示すものもある。
- 3. 遺構写真の撮影方向は、対向ページ に示した。
- 4. 遺構実測図地山の横線は、すべて水 平線である。

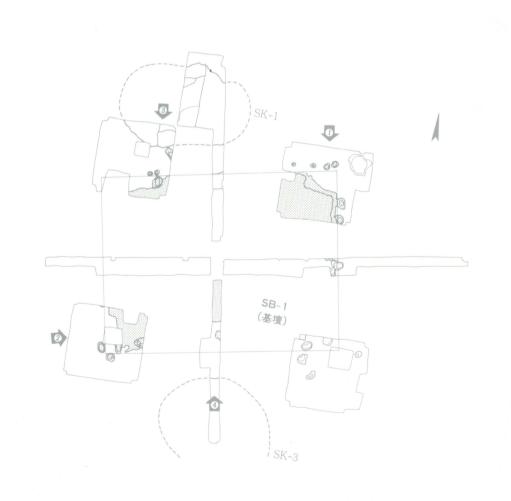


第1図 長熊廃寺跡周辺の地形図(1:2,500)

矢印は、写真撮影方向を示す。



空からみた長熊廃寺跡周辺の地形





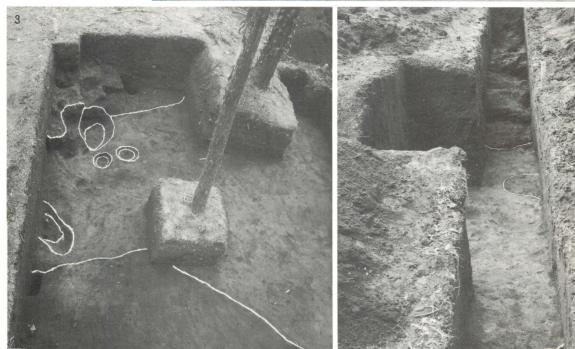
1. 基壇北東隅 北から

2. 基壇南西隅 西から

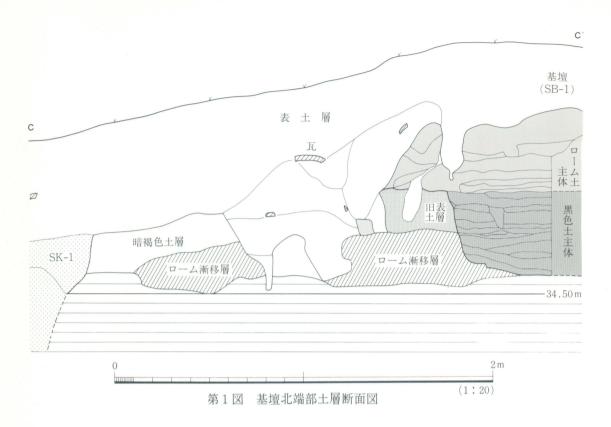


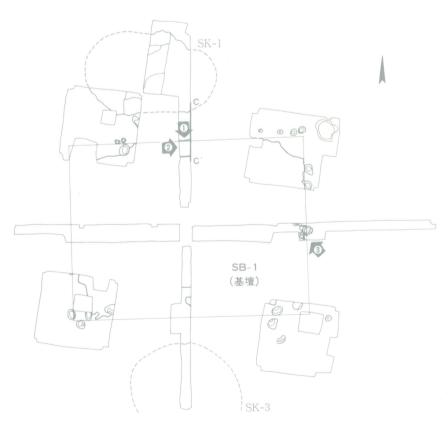
4. 基壇南側 南から





対応実測図 PLAN 3







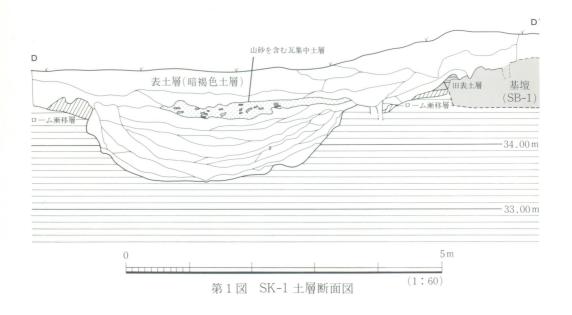
1. 基壇版築状況 北から

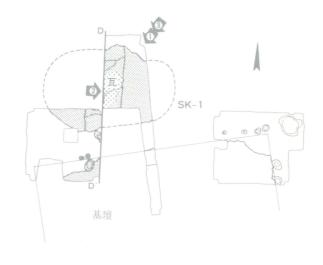


2. 基壇土層断面 西から



3. 基壇東側 南東から







1. SK-1 検出状況 北東から

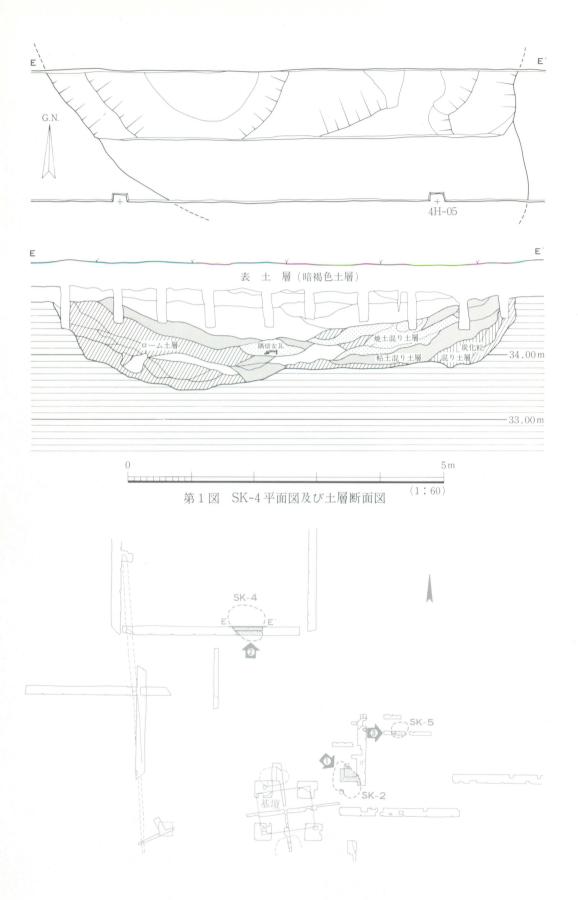


2. SK-1 覆土上層 (瓦出土状況) 西から



3 . SK-1 調査状況 北東から

対応平面図 PLAN 3





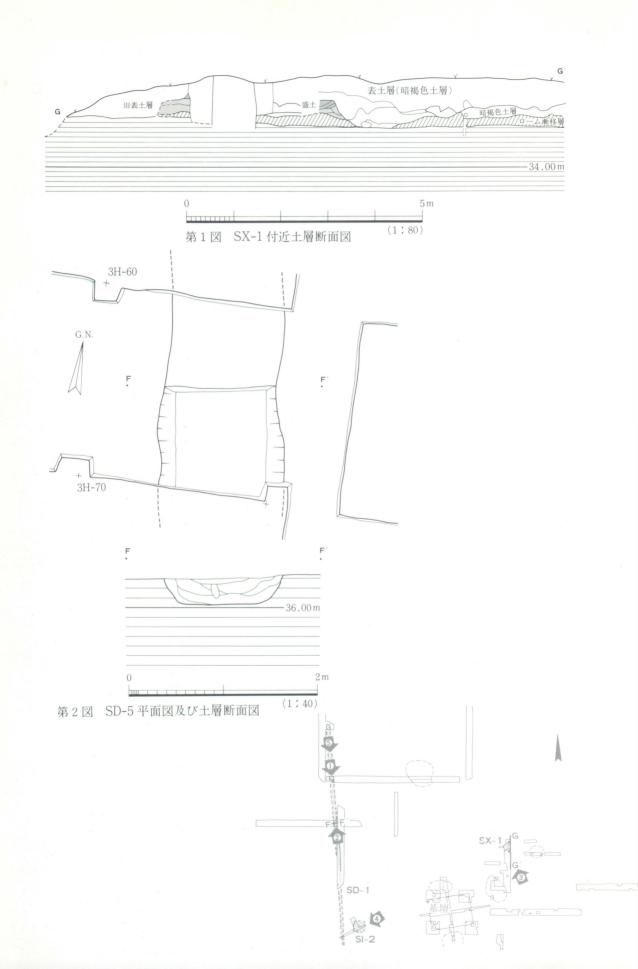


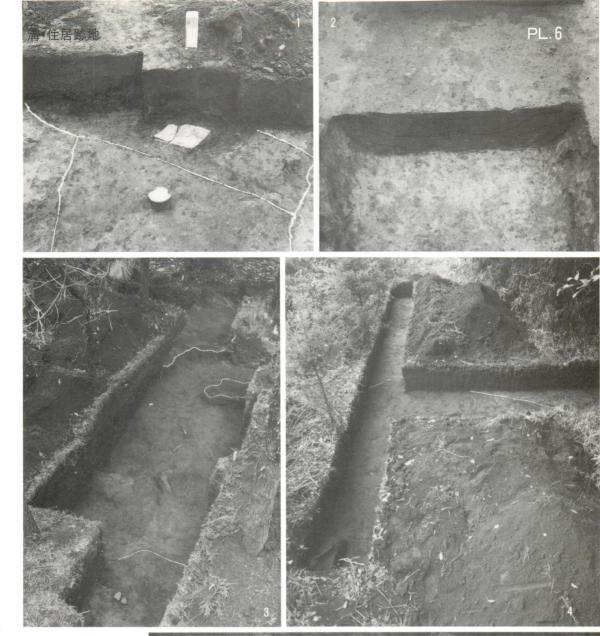


2. SK-4 土層断面 南から



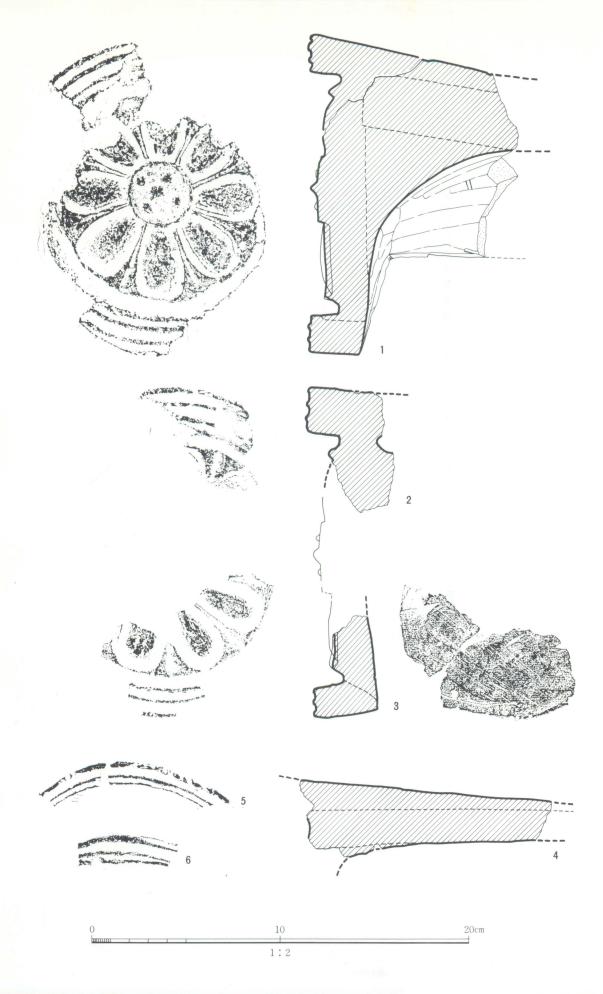
3. SK-5 調査状況 南西から



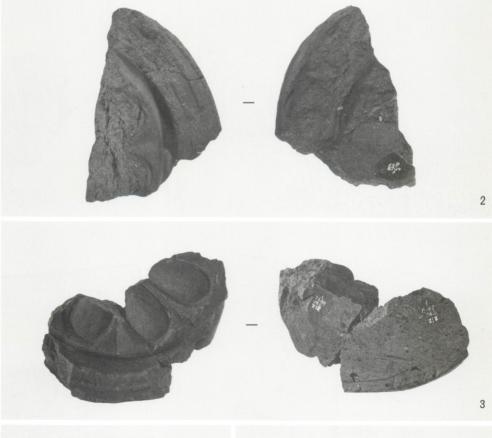


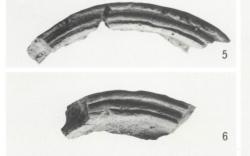
- 1. SD-5 遺物出土状況 北から
- 2. SD-5 土層断面 南から
- 3. SX-1 検出状況 南南東から
- 4 . SI-2 検出状況 北東から
- 5. SD-5 検出状況 北から



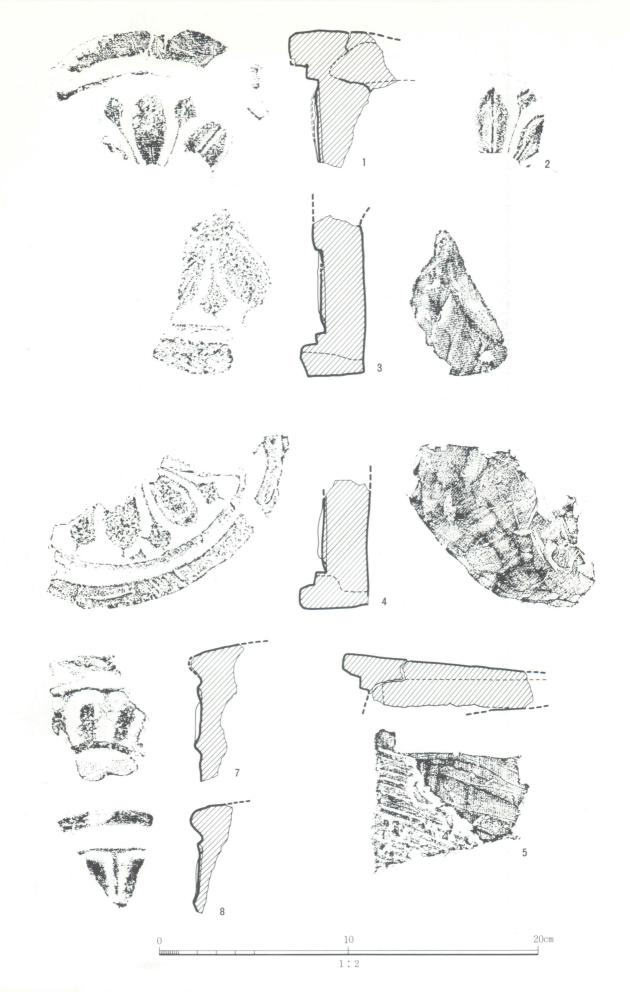


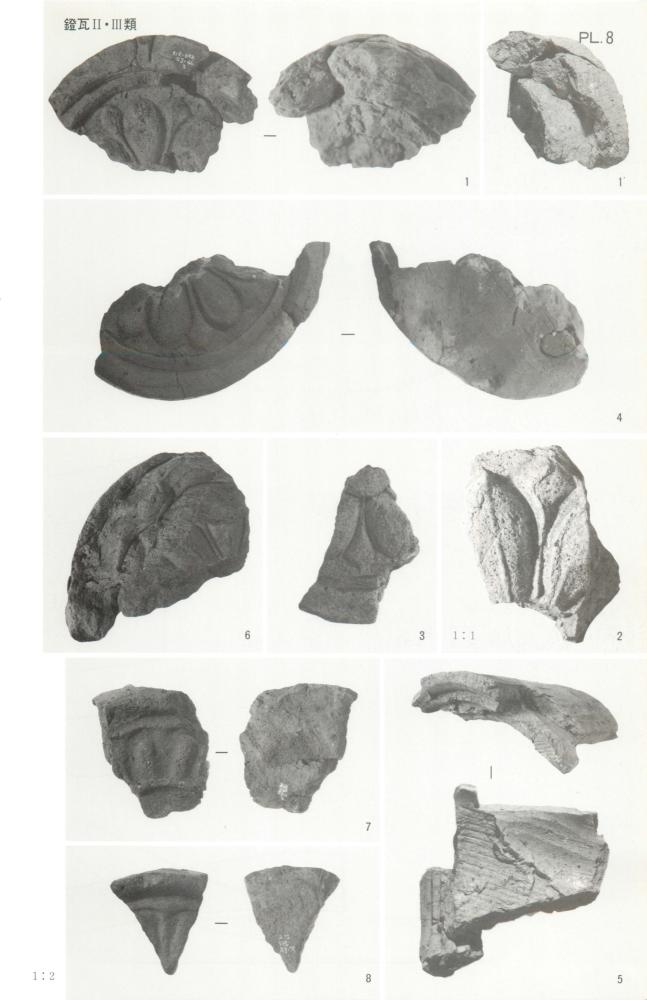


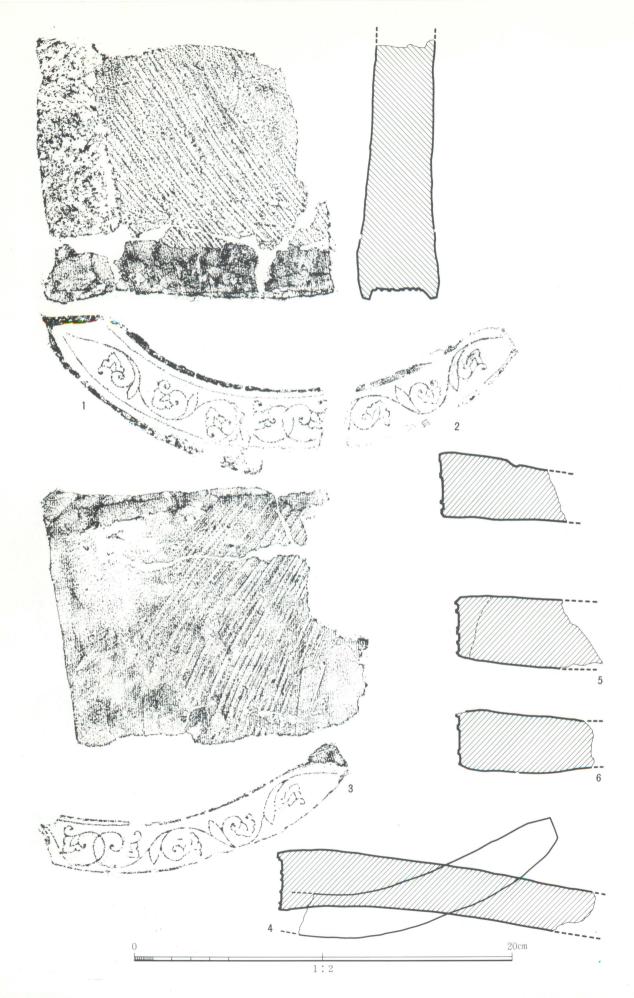


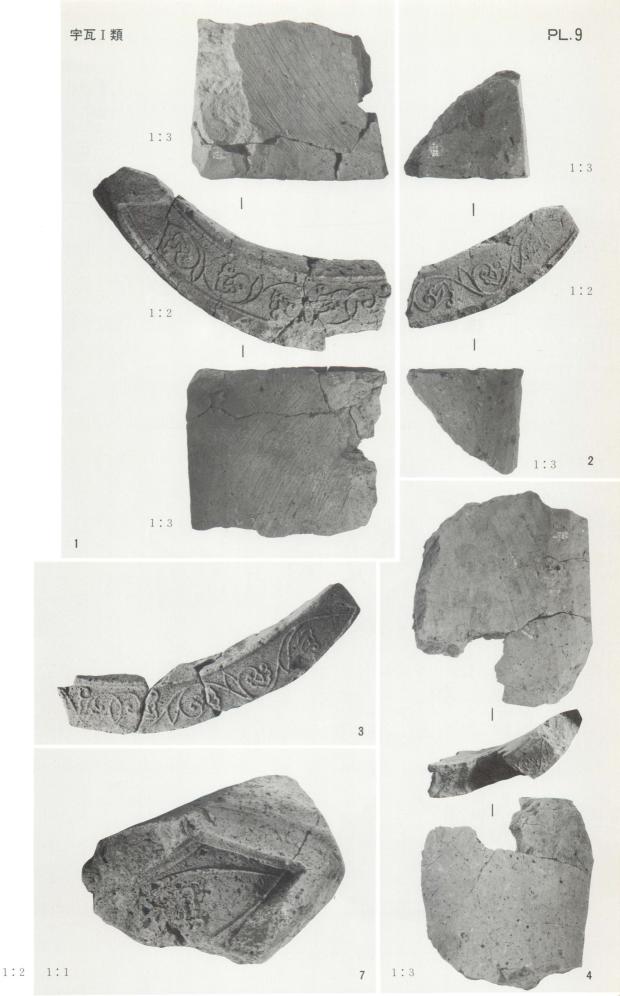


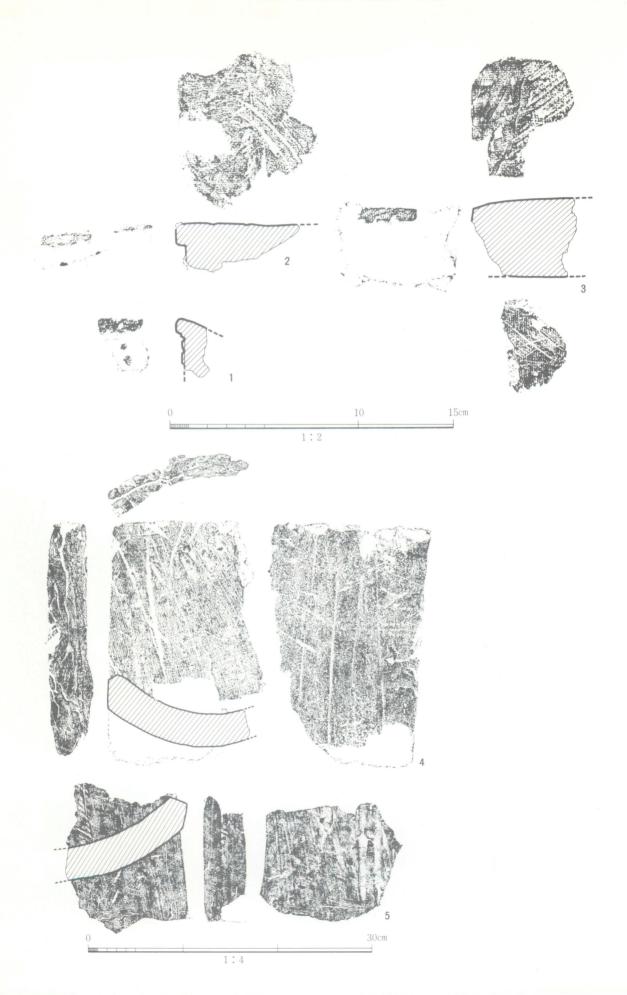




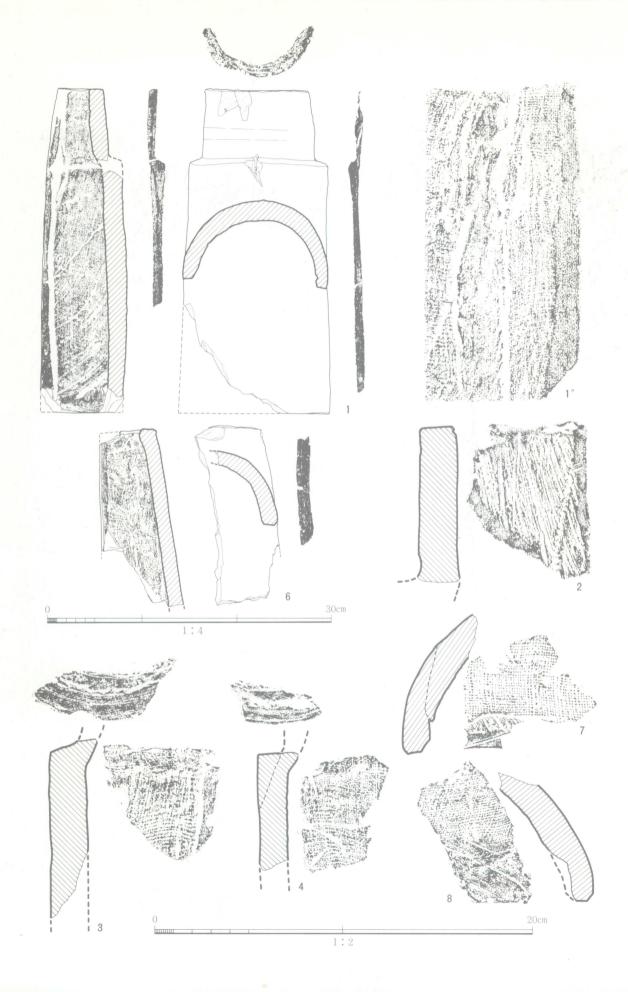


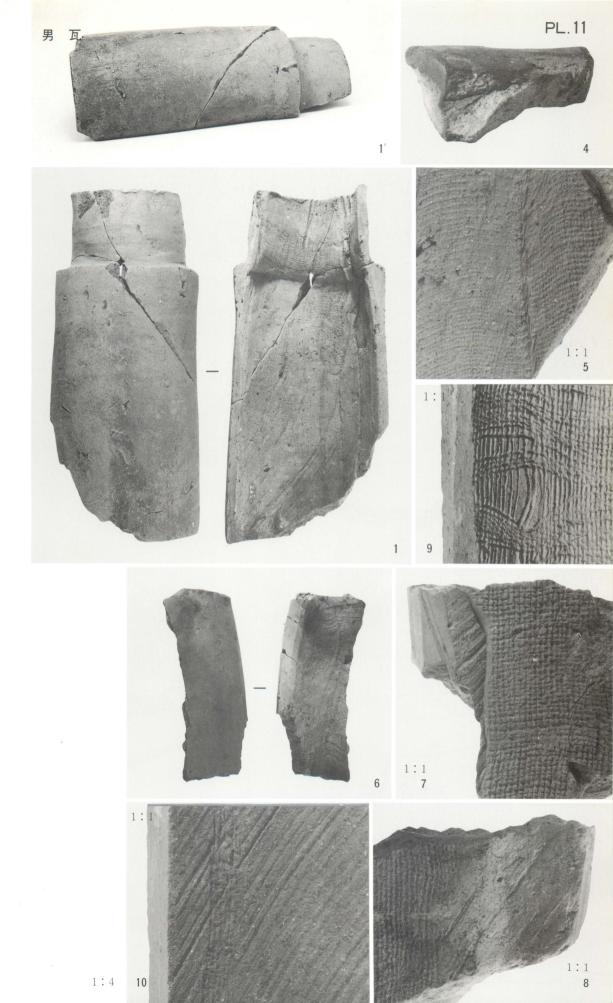


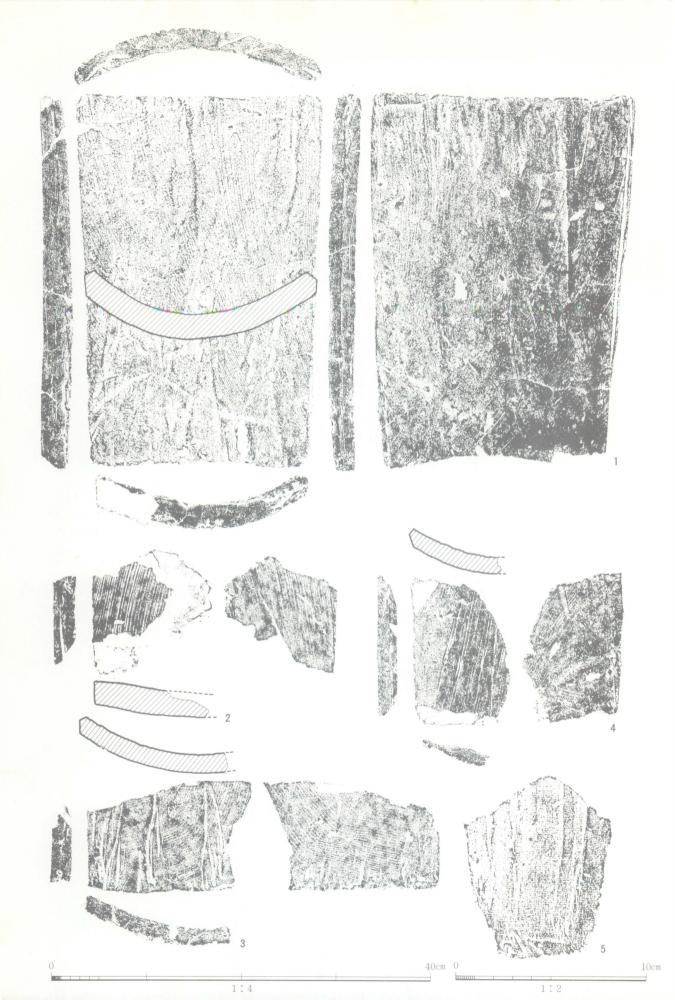




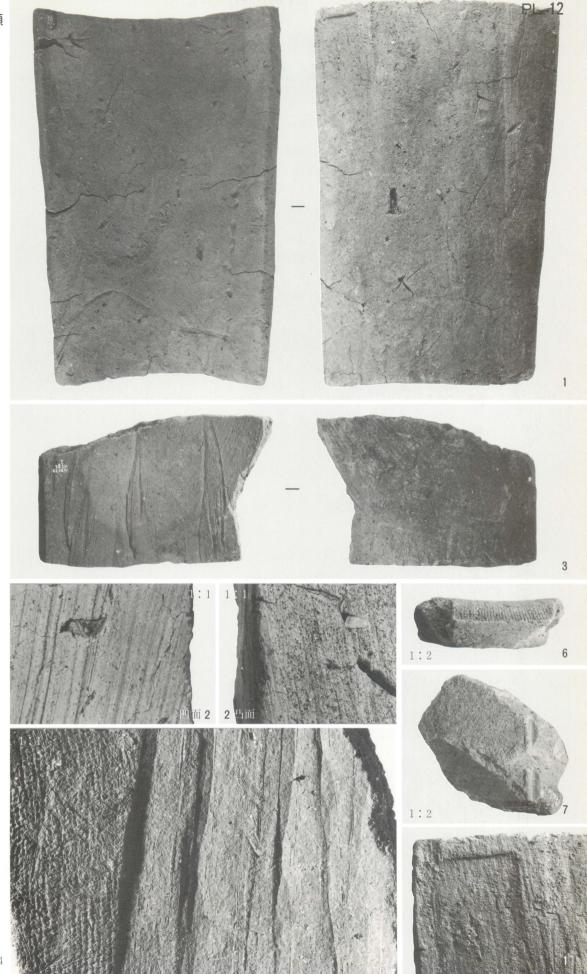
1:3 1:2

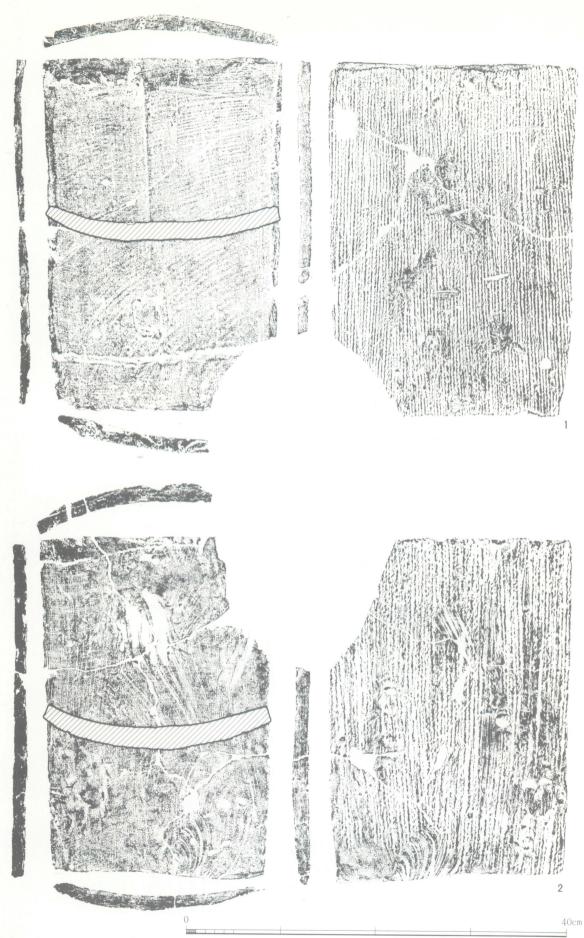


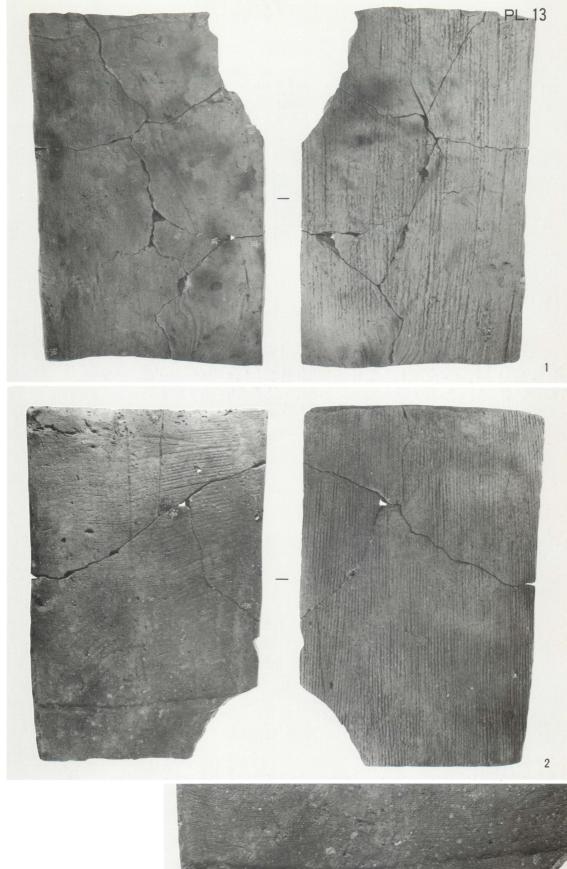




女瓦I類

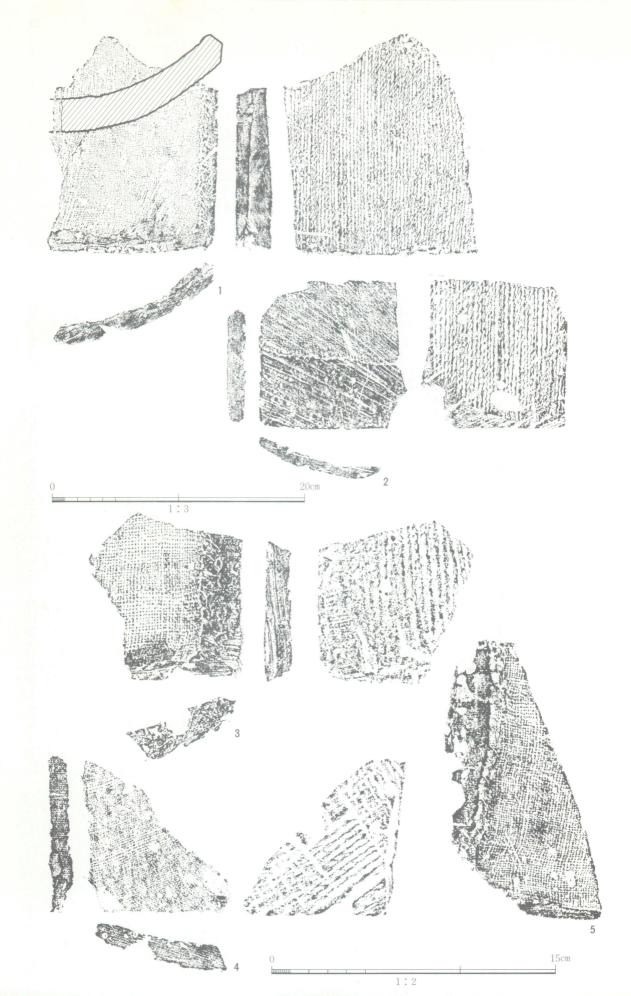


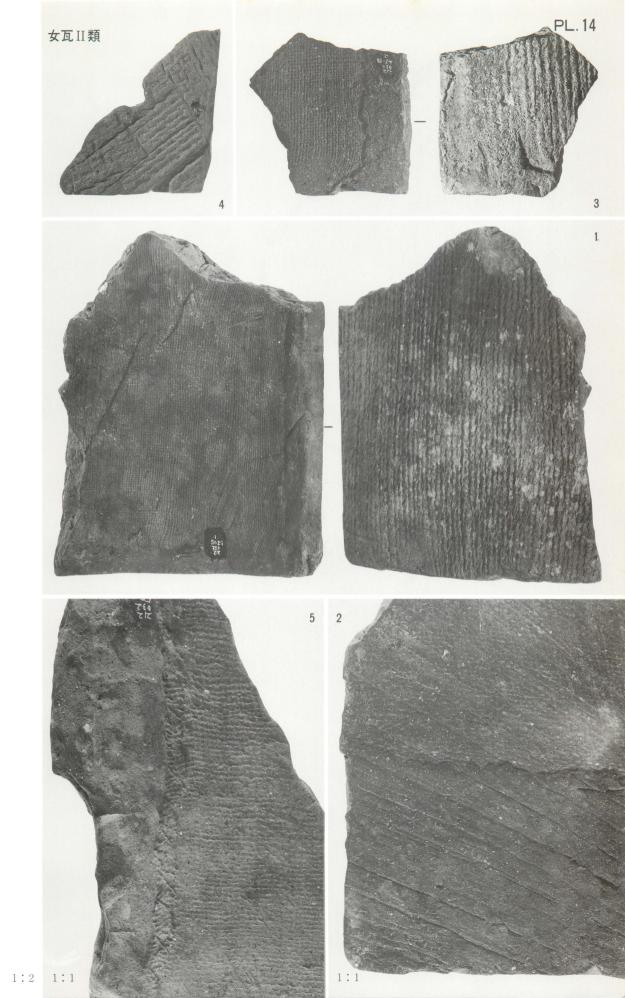


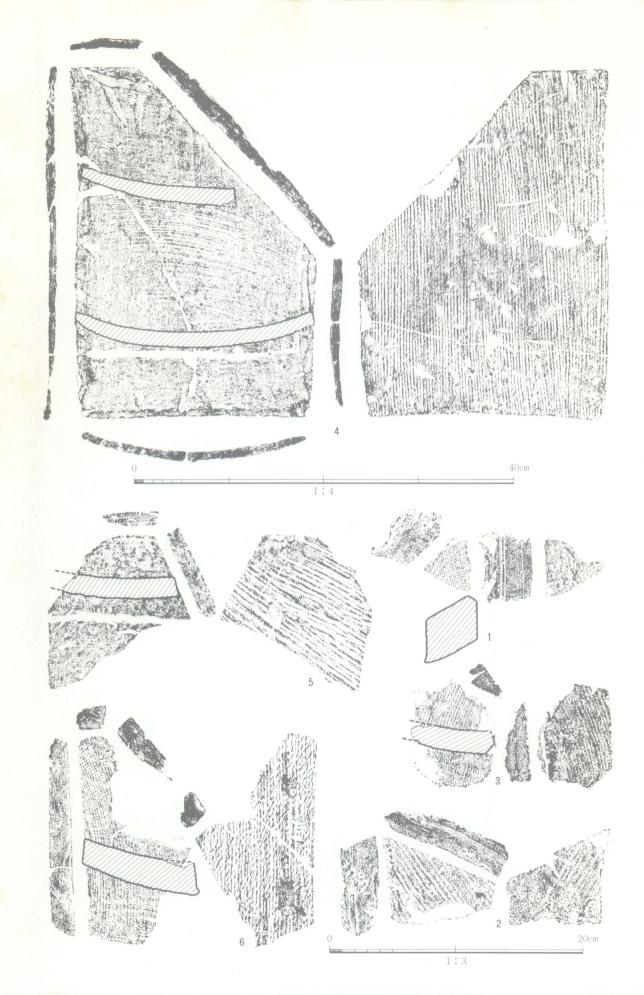


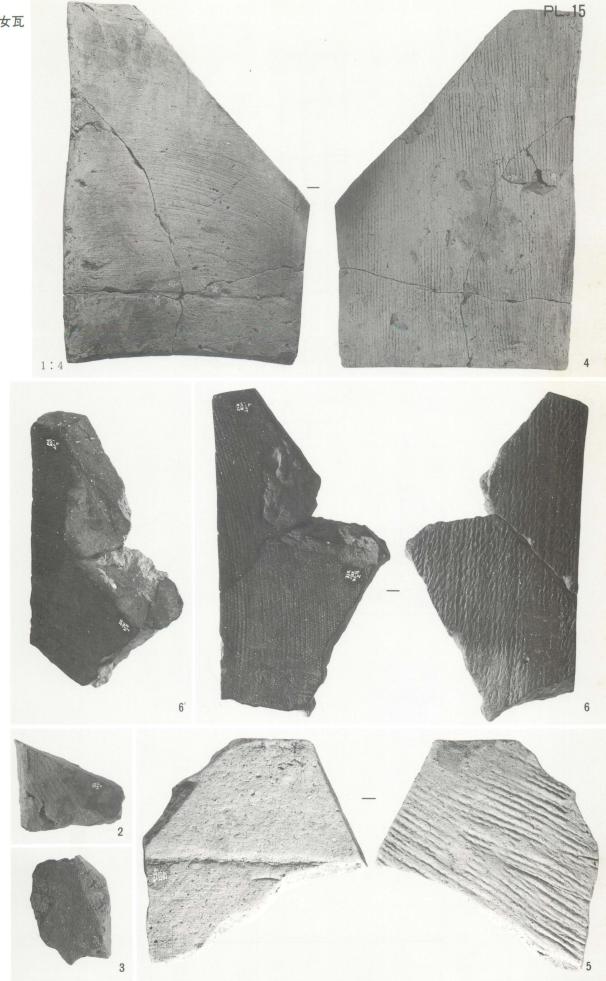


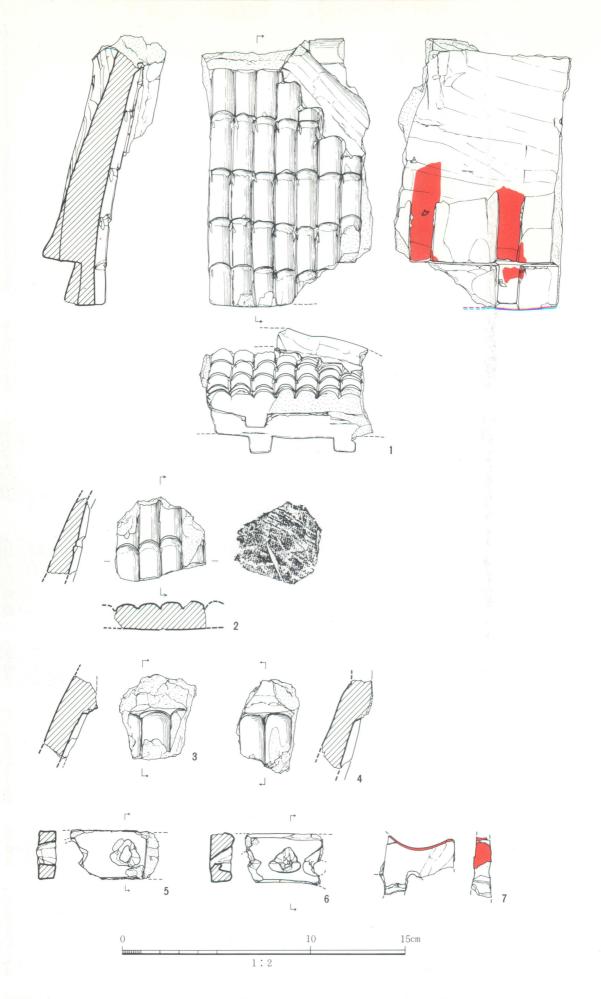
1 . 4

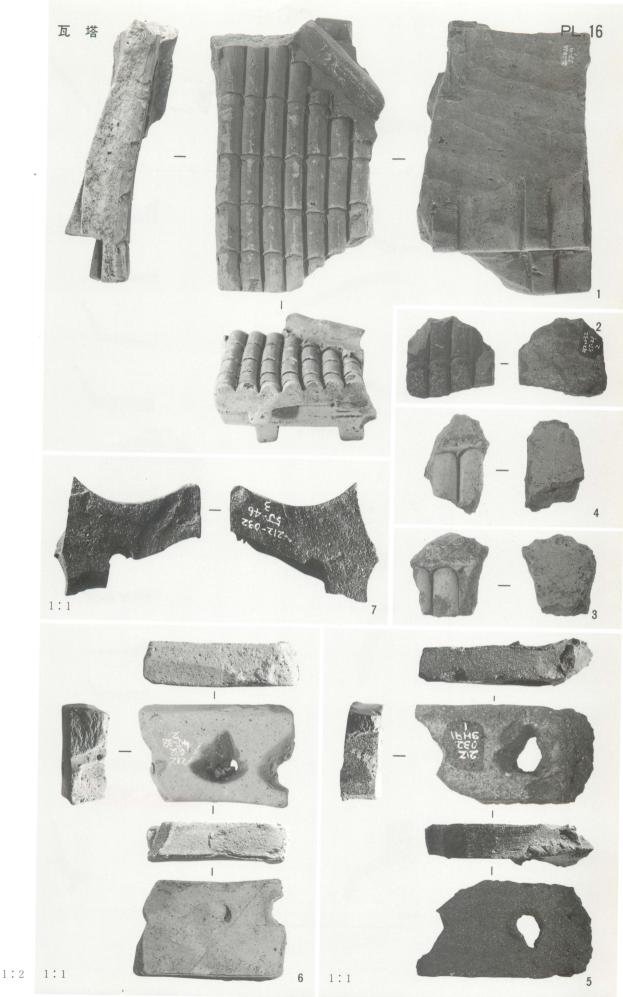


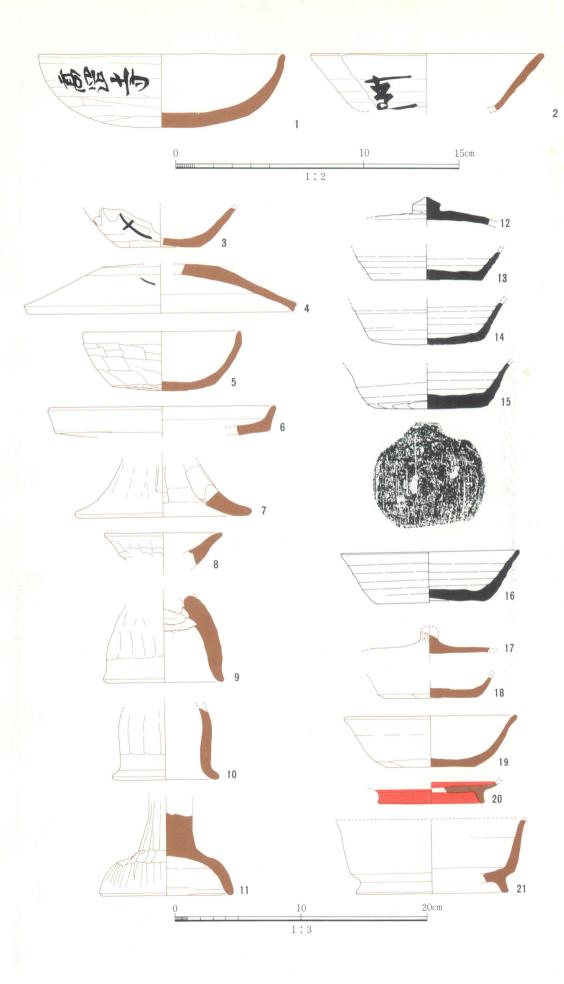




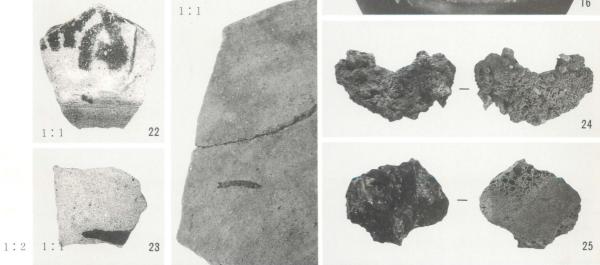


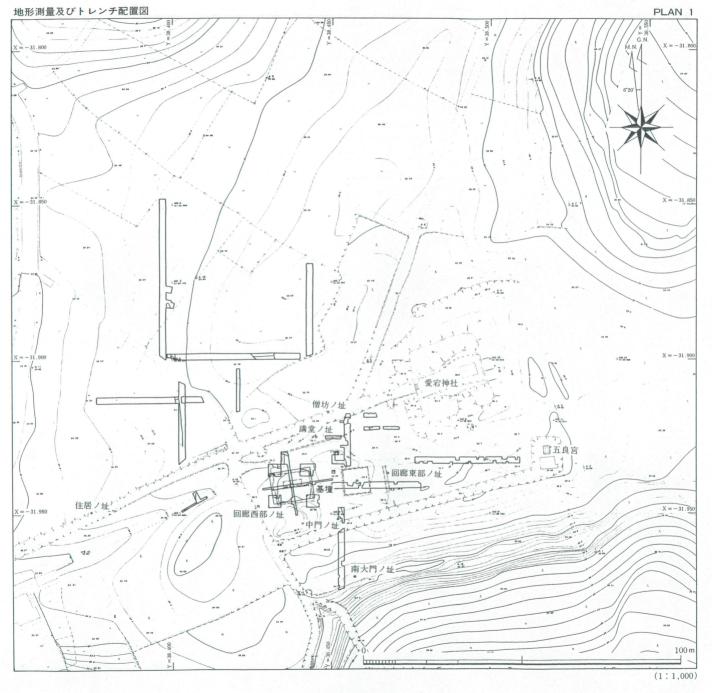


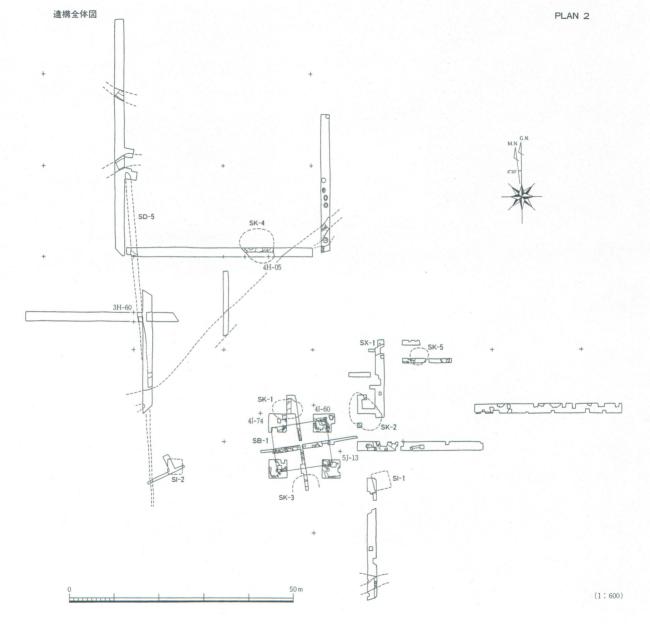


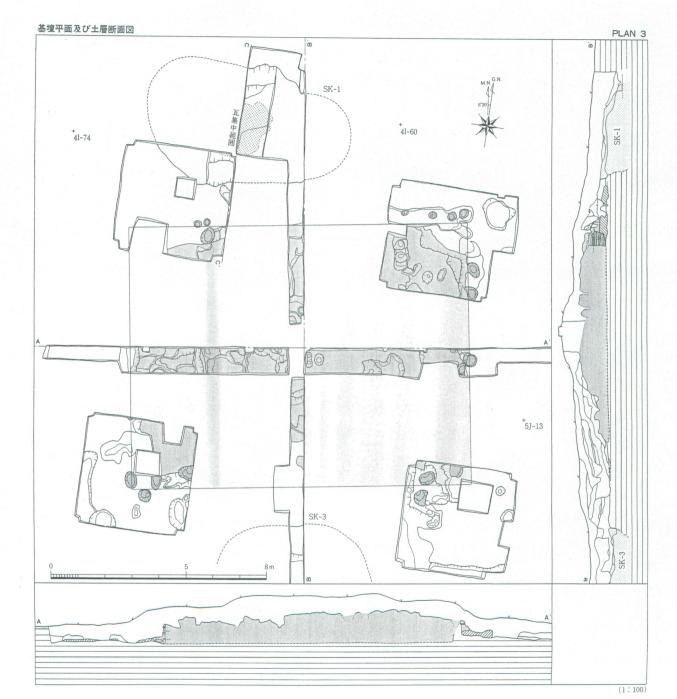


PL. 17 土器他 1:2.5 1:1 3 19 1:2.5 1:2.5 16 1:1 **4** 1:1 16 24









佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告書

昭和62年3月31日発行

発 編 集 財団法人 千葉県文化財センター 千葉市葛城 2 丁目10番 1 号

 印
 刷
 有限会社
 正
 文
 社

 千葉市都町2丁目5番5号